

139

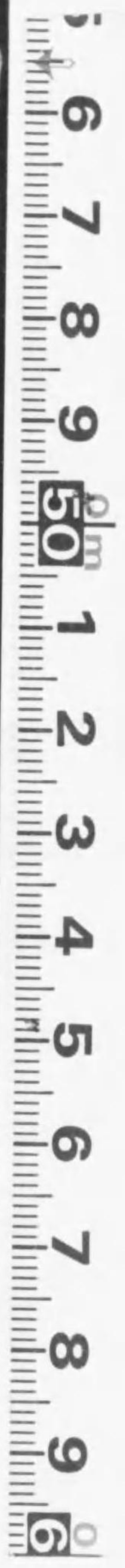
特265

617

田パンフレット第三十二

自由の考察

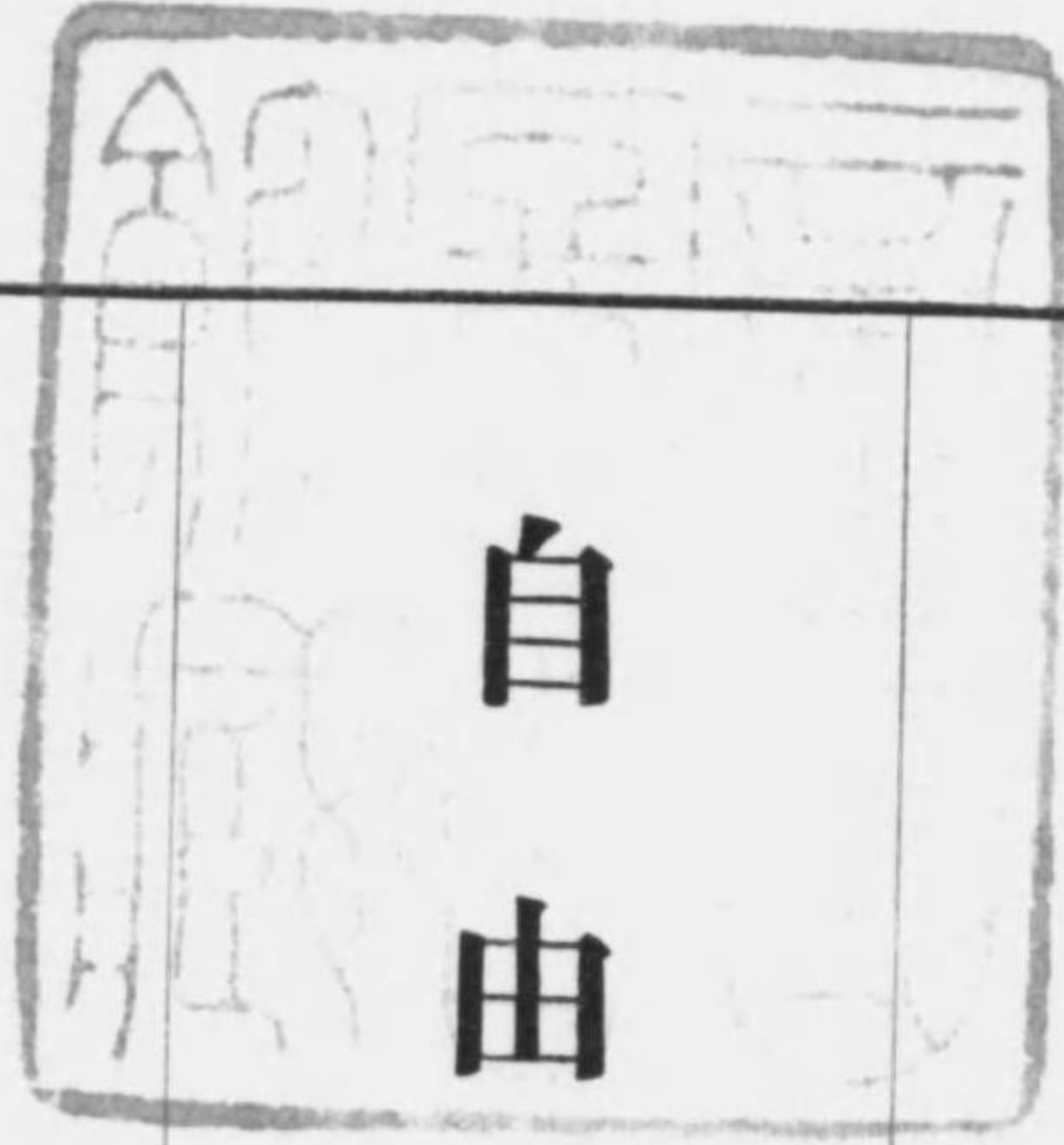
曉
鳥
敏
著



始



47265
617



曉
烏
敏
著

自
由
の
考
察

北
安
田
香
草
舎
版



序

自由平等と漫然いうてをるが、或場合には自由と平等とが矛盾した内容を持つことがある。平等には社会的傾向があり、自由には個人的傾向がある。その調和は畢竟絶對境地に到らねば得られぬことである。かうしたことを考へついたので、その考をまとめてみたいと思つて、昨年九月の十三・十四の兩夜、東京本郷の佛教青年會館で東京曉烏會のために『自由の考察』と題して講演をした。これを平松子が速記してくれた。又十月の八・九・十の三夜、熊本市の九州新聞社樓上で熊本曉烏會のために同じ題目について考へつつ語つた。それを江崎・力石二子が筆記をし、『九州新聞』に連載された。

この二回の講演は同一題目についてであるから、殆ど同じ點がある。しかし、講演の場所が違つてをると、九月から十月へかけて私の心の進展したところもあるので違つた點もある。さうしたことを自分で反省してみるのも面白いと思つて、同じ題目の二つの講話を一つにまとめてこのパンフレットにすることにした。東京の講話と熊本の話との間に具體的の例話の重複したところなどは削除したところもある。『九州新聞』に掲載せられたものには、相當に誤謬もあることも發見して訂正

をしましたから、その切抜などお持の方は、この書によつて斧正を加へていただきたいと思ひます。

自由といふことを考へてをるうちにカントの自由論とセリングの自由論とを詳しく調べたいと思つてをるが、いろいろの事に忙しうて、本書の内にその研究を加へることの出来ぬのを残念に思ひます。

とにかく、この一篇はフランス革命の際に起つた自由平等の欲求的な叫びの矛盾から考へついで現代の日本を反省せんとした試みでありますから、單な机上の空論ではなくて實際生活の具體的な道程であることを思つて讀んでいただきたいと思ひます。

昭和七年三月三十一日

北安田にて

曉 烏 敏

目 次

- 一。東京佛教青年會館にて……………一
- 二。熊本九州新聞社にて……………八五

自由の考察

曉
烏
敏

一。東京佛教青年會館にて

その一上

去年の春頃、或若い方から熱心な手紙を受け取りました。非常に長い長い手紙で、私はああいふ長い手紙は始めて見ました。細かな原稿紙二三百枚もあつて、その中には、自分の考やら、私の著書についての批判もあつて、いろいろ考へさせられることがありました。自分のやつてをることが、どう

いふ風に他に映るかといふことについても、いろいろ考へさせられました。あなたの書いてをられるいろいろのものには、個人主義的の臭が濃厚だといふ言葉が、その批評のうちに書いてある。本人は重要な論點として書いたのではないらしいが、近頃の言葉で云うたら、私にはびんときたのであります。はてなと考へてみたのであります。さうして考へてみますと、私が青年時代から、三十七八歳までの思想は社会的な色彩が濃厚でありました。だから平等的な思想發表が多かつた。それが後に、私の思想が稍變化しまして、その後の傾向には、自由といふやうなことが多く見えるやうになりました。そしてそこには、個人主義的な色彩の濃厚であるといふことを見出したのであります。さういふ點から、云はば自分を組の上に載せて料理をするといふやうな心持で、明治以後の日本の思想の傾向を合せて考へて見たいと思ふのであります。

私は明治十年に生れた者です。明治十七八年頃のことです。私の郷里は石川縣で、金澤から三里程田舎の村であります。さういふ邊鄙なところにも、その頃は自由民権といふやうな聲が随分響いてをつたものと見えまして、その頃私の家にお經を習うてをりました書生さん、番僧とか役僧とか云はれる人が、或時竹のステッキで犬を毆つて、自由の權利だと云うて威張つてをつた。何でもそれがその晩の夕飯の後の笑噺になつたことがあつた。これは私の七八つの折のことであつたが覚えてをります。犬を毆つて、そして自由の權利だと云うて威張つてをる若い坊さんが私の寺にをつた、といふことを見ても、その頃の日本の民心の趨勢が察せられるのであります。それから稍後れた時に、或はその前後でありましたか、板垣退助氏などが自由民権といふやうな主張を盛にせられました。岐阜へ行かれましたさういふやうなことに關して演説をせられました。板垣さんは岐阜で刺客に襲はれ

ましたが、その時板垣さんは意氣軒昂の態度で「板垣死すとも自由は死せず。」と叫ばれた。これは當時人口に膾炙した言葉です。今でも岐阜の公園にまゐりますと、その時の記念として、板垣さんの銅像が出来てをります。その後板垣さんは自由黨といふ黨派を作つてをられた。その黨員の一人で、板垣さんの股肱の同志に、星亨といふ人があつた。この人は代議士であり、東京市會議員であり、剛腹な人であつたが、東京市會議事堂で某といふ人のために殺された。その星亨といふ人などが、自由黨の首領株であつたといふことも面白いことでもあります。

自由平等といふことは随分叫ばれました。明治元年に御煥發になつた五ヶ條の御誓文のうちに、「萬機公論に決すべし。」といふ一條があります。それから私共が明治二十三年に中學校の一年へはいりました頃には、學校内で、「天下は天下の天下なり、天下は一人の天下に非ず。」かういふ言葉が随

分流行つたものです。誰かの顔を見るとすぐ「天下は天下の天下なり。天下は一人の天下に非ず。」と云うたものです。ここにも、自由平等の叫と同じ心の流が現はれてをるのであります。

日本の國にその自由平等といふ叫が起つたのは、今から五六十年前の事になります。ヨロッパの方ではどうかと考へますと、まだそれから五六十年前、即ちフランス革命が起つた時代から、自由平等といふことの叫聲が高くなつてきたのであります。フランスの革命の標語は、やはり自由平等であります。その頃の或人の叫に、「我に自由を與へよ、然らずんば死を與へよ。」といふやうな言葉のあつたことが當時の歴史の上に記されてをります。ヨロッパの方で、この自由といふ言葉、平等といふ言葉の共に叫ばれたのは、その思想の源泉を云ふならば、遠くは十四世紀文藝復興の頃、或は、ギリシヤ思想の勃興といふもの即ち所謂異教徒の空氣が、キリスト教の絶對專制の

教會、それと同じ思想の上に出來た教權思想、或は絶對獨裁君主政治といふものと一緒になつてをる中世の政治と、或は信仰との權力に對する反抗といふやうな意味で、自由或は平等といふ叫が起つたやうであります。宗教と云へば、もう既にマルチン・ルーテル(一四八三—一五四六)が、ローマ法王に反抗した時に、プロテスタントが起つた。あの時に信仰の自由といふやうな叫が上つてをつた。政治上で云ふなら、フランスのボルボン王朝のルイ十四世(一六三八—一七一五)の傲奢な時代からルイ十五十六世と相尋いで立つたフランスの帝政時代、あの頃の帝王の傲奢な生活は人民の膏血を絞取ることによつて仕遂けられてをつた。その頃の或時期には、百圓の收入のある人には、五拾圓の税金が取られ、その外、拾何圓の教會費があり、また拾何圓の間接税があり、かくて八拾圓まで税金として取られ、後貳拾圓で漸く糊口を凌ぐといふやうな時代であつた。つまりその時分には、帝王と少數の貴族僧侶

といふものが物質的な贅を盡してをつた。一般の人民は、あらゆる壓迫を受け、束縛を受けて、膏血を絞られてをつたものです。その反動で自由といふ叫が上つた。思想家としては、これより以前にボルテール(一六九四—一七七八)ルソー(一七二二—一七七八)などがその叫を上げたのであります。かやうな状態を見ますと、この自由といふことの叫の本には、不自由といふことがある。不自由といふことは所謂、束縛や壓迫といふものがあるといふことである。それから平等といふことに對しては、不平等、或は階級といふものがあります。此の考は、同じ人間でありながら、或人は非常な贅を盡した暮をしてをるし、或人は貧困に堪へない暮をしてをる。ここに於てその貧しい束縛を受けてをる階級の人から、人間であるならば、平等でなければならんといふ叫が出て來るのです。これもやはり、不自由からの解脱、即ち自由を得たいといふ願から起るのであります。

ところが、その自由と平等といふことでも、よく考へますと、自由のある所には、時によると平等がなくなり、平等であるときに自由はなくなる。自由平等が二つとも存在するといふのは、絶対の境地においてのみあることです。相對の世界において、相對的自由があるならば、平等はない。又平等であるならば、そこには相對的自由がなくなる。ところが當時はただ反抗的に動くものですから、平等といふときには、俺だけが苦しんでをるはずがない。かういふ叫が出るのです。それから自由といふときには、やはり俺達ばかりが不自由になつてをられるといふことから起つてをる。フランスの革命が、さういふ自由平等の意氣込からだんだん熏習せられて、出来上つたやうに、今日のこの社會革命或は階級闘争といふやうなものも、自由或は平等といふ人間の鬱勃たる氣概によつて起つて來るやうです。ですから、いづれの世でも、その現實の社會狀態が不平等であり、壓制であり、束縛であると

いふやうな場合には、そこから自由平等といふ叫が上つて、そこに社會革命といふものが勃發して來るのです。ですから、その社會が絶対に自由平等で無いにしても、自由に近い、平等に近い社會であるならば、自由平等といふことが、革命を起すいろいろの力を持たなくなります。その社會が非常に不自由で、非常に不平等であるときに、この自由平等といふ叫が、非常な自熱的な力をもつて勃興して來るやうであります。

最初にヨーロッパの傾向を見ますと、どうも政治的に自由平等といふことが叫ばれたやうであります。不平等といふと、やはり壓迫されてをる階級ですな、さういふ階級の人が、壓迫してをる階級と平等になりたいといふ希望から出るです。だから自由といふことを人民は望む。例へば、フランスの革命の時に、フランスの革命黨が、「我に自由を與へよ。」と云うた。その自由といふものは、どんなことかと云ふと、ボルボン王朝のルイ十四世やルイ十五

世といふ帝王、或は、帝王に仕へてをつた貴族の生活を見て、その羨望から自由といふことを考へたのぢやなからうか。自分は壓迫を受けてをる不自由な者だといふことを考へると、自分を壓迫してをる階級の人のことを考へる。それを思ふと、フランスの人民は、自分の自由平等といふことを叫んだ、その目當は誰かといふと、王様や、貴族の生活である。我に自由を與へよといふことは、我に王様や貴族のやうな生活を與へよといふやうな心から起つたのぢやなからうか。自分が人の上に否定してをることが、自分の上に肯定となつてをるのぢやないか。人の自由は氣に入らんが、その自由を自分が得た、かういふやうな心持で、我に自由を與へよの叫となつて現はれてをります。さういふことを思ふと、このフランス革命の當時、フランス國民の頭の中には、皆が、帝王のやうな暮をしたい。皆が帝王に關係した貴族のやうな暮がしたいといふ願が發つてをつた。昔は、身分が違ひ、生れが違ふと諦め

てをつたのです。ところが、人間は平等であるといふことが、所謂ギリシヤ思想によつても、キリスト教的思想によつても、頭をもたけて來てここに天賦人權などいふ考が生れて來たのであります。ぢやからその頃には、どうして自由思想といふものは、教會に對する反抗です。いつでも新しい革命家といふものは、當時の宗教に對して、否定的態度を取る。フランスの革命の時にも、教會堂を破壊し、キリスト教を禁じた。ロシアでも現在の革命をやる時には、やはり宗教を否定した。どうしても宗教といふものは、その社會の保守的の氣風を養成するものであります。そこに社會の落着といふものが出來ると同時に、また社會の硬化をつくる弊もあるのです。フランス革命の當時は、教會に對して非常な反抗を持つた。教會に對して反抗を持つといふことが、一面から云へば、今までは神の奴隸であつたものが、神のやうになりたいといふことから起るものです。こう云ふと、本當の意味において、教

會に對する反抗者は、キリスト教信者であるといふことも云ひ得るのです。神の奴隷でなしに、自分が神になりたいといふ望が起るのです。かういふと固定した保守的の雰圍氣の中に、情眼を貪つてをるより、それを打ち壊して出るといふところに本當の自由といふものの空氣があるやうにも思はれるのであります。ともかく、フランスの革命をやつた人達の心の中には、さういふ尊い心を持つた人があつた。自分がそれを否定してをつて、我に自由を與へよと云うてをる人に、「お前の云うてをる自由とはどういふものか。」と聞けば、「束縛のないこと。」と云ふに決つてをる。「束縛のない生活とはどういふ生活か。例へば此の世において誰のやうなものか。」「それはボルボン王朝のルイ十四世、或はそれに屬してをる僧侶や貴族のやうな、あの贅を盡したたくさんの宮殿をもつて、夏は涼しい部屋に、冬は暖い部屋にといふやうな、自分が働かずして、人の膏血を絞つて暮す。例へば、皇后の指輪を買ふ

ために何百萬圓の金を費してそれを得る、かういふやうな状態に自分もなりたい。」と云ふのぢやなからうか。我々が自由を得たいといふことは、我々も王様のやうな生活がしたいといふのぢやなからうか。むしろ明かなさうした自覺はないかもしれんが、自覺はなくても、暗にさういふ心がありはしないか。例へば、金持の贅澤を得るにしても、やはり今日でも平等或は人間の幸福の均等、かう云うてをる。その理想もやはり少數の金持の姿が見えるのぢやなからうか。つまり革命にこれを見ると、フランスの革命の頃にナポレオン（一七六九—一八二二）が出て來たのは面白いです。私はその頃に英雄が出るといふことは、その時代が英雄を生んだのだと思ふ。いくら偉い人でも、一人ぢや動けん。ナポレオンは豪傑に違ひない。その一人のナポレオンが、フランスで活動するのは、フランスの國民が、ナポレオンを動かしてをると云へんだらうか。後にナポレオンがウォーターローで敗れ、そしてセントへ

レナの孤島に流されて後にパリに會議があつた時、フランスの何とか云ふ政治家が、フランスとヨーロッパとの喧嘩は、ナポレオンとヨーロッパ全體との喧嘩で、フランスの國は何でもない。ぢやからナポレオンを罰するならばよいが、フランスの國民に償金を要求する理由はないと云うた。これはあまり無責任な話だ。戦争はナポレオンの罪で我等は知らんぞといふのである。近代でもさういふことがある。前のロマノフ王朝の頃にロシアの國としてたくさんの借金をした。ところが、ソビエットの革命派の人達は、「さういふものは我等は知らぬ。それは前の人がしたのだ。我等は新しいソビエト聯邦を立てたのだ。前のロシアの繼續でない。」と云うてをる。さうかと思ふと、日本がシベリヤで何かしようとする、これは俺の領地だ。露領で何をしてをると云ふ。こんな議論も今では通用してをる。借金を済す時は、それは國が違ふと云ひ、土地を守る時は、これは昔からのものと云ふ、かういふことは

外國でも通用するのみではなく、日本でもそれに従はねばならぬと思つて、ソビエトロシヤが前露國の借金を返さんこととシベリヤ方面の管理權を主張することとを同時に是認してをる人もあるやうです。今の中華民國の政府もこれと同じやうなことをいうてをる。清朝時代の條約は私達は知らぬとはねつけて、しかも清朝の領地は自分達のものと主張するのである。これも矛盾した言分である。滿蒙問題などこの例である。日本が嘗て清國政府と滿蒙問題についての條約を取結んだ。ところが清國を亡ぼして代つて立つた中華民國政府は、國が違ふからそんな條約は我等の關するところでないといひつつ、滿蒙は中華民國の土地であるといふやうに主張してをるのである。これも道理の立たぬことである。中華民國は新しく出來た。中華民國が出來る前から日本は前の清國から滿蒙における種々の利權を得てをつた。中華民國が清國を繼承するならば條約の履行もせねばならず、繼承しないならば滿蒙に對し

ては中華民国も日本も互角の権利を持つてをるといふてよい。ところが、面白いもので、借金を返す段になると、これは昔のものの、領地のことになると、これは俺が繼承する、さういふ理窟が立つものと見える。けれどもそこに不合理なところがあるのである。自由にナポレオンが戦をした。我々を荒したといふことは、やはりフランス國民が責任を負はにやならんことである。ナポレオンが悪いと云ふなら、フランス國民が皆悪いのである。その頃のフランスでは、ナポレオンの敗戦はナポレオン一個人の問題でフランスの關したことでないから償金を拂はぬといふ議論を承認するものが多かつた。世の中はいろんな理窟が通るものである。ナポレオンが出た時には、それを出したフランスには、さういふ思想があつた。ナポレオンは革命者の生粹である。ナポレオンは皆を代表して出た。それを皇帝にした。萬歳を叫んだ。その時分の一般人民は皆皇帝になりたかつた。その願をナポレオンによつて満足さ

れたときに、自分達が皇帝になつたやうに喜んだ。ところが、ナポレオンが皇帝になつてみると自分達が依然として壓制の下にをる不自由なものだから、又ナポレオンに反抗するやうになつた。

日本では平民の原敬氏が總理大臣になつた。長いことやつてをると、平民の總理大臣では、壓迫感を受けるからと云うて、大切な平民大臣を殺すといふことが出て来る。面白いものです。自由民権といふことを行つた者に星亨といふやうな傲岸な人が出た。自由を望んでをるものがその反對の平等を望んだり、平等を望んでをるものがその反對の自由を望んだりして、しかもそれに氣づかずにをるやうなことが度々あるのであります。先度も面白いことがあつた。これは朝鮮の京城に行つた折のことである。或人が某を評して「彼は有名な守錢奴です。けちん坊で有名なのです。」といふてゐた。ところが私共が逢へばさういふ悪い人とも思はぬといふたら、「あなたが逢へば

さういふことはないでせうが、中々評判の悪い人です。」というたのである。内地へ歸つてから、私にその話をした男について私が或人に話をする時、その人が、「彼は有名なけん坊で、ずるぶん人からいやがられてをる男です。」というてゐた。私はそれを聞いて面白いことだなあと思つた。やはり人を批評するのは、自分を批評してをるものだと思つた。いつか私の近所で坊さんの集會があつた。そのとき、皆が「どこかの主人はけん坊だ。」と云うてゐたので、「あなた方はどうしてそれがわかつたのです。」と聞いたら「あの家へ物を貰ひに行つても出したことがない。」というてゐたので「けん坊の處へ物を貰ひに行くのはけん坊の上手でないか。」というて笑つたことがあります。大分年をとると、人の話を靜かに聞くことが出来る。若い頃は、人が話をすると氣に入つたことはどしどし賛成する。年が寄ると、人が熱辯をふるつても、すぐに熱しない。だから老獪老巧などと云はれるのだ。ロマン

ローランは人間が四十以上になると悪漢になると云うた。その點から云ふと、私は大分悪漢になつた。人が何か云うてをると、はてな、ああいふことを云うてをるが、あれは、どうして、どこからああいふことを考へ出したのかと考へたり、ああいふことをいうて何にするつもりかなと考へたりするのであります。年寄の前であまりめつたものは云へんものです。裏を考へられます。自覺的にその人を斃さうと思つて云はないにしても、或事を云うてをる、その言葉の底に自分さへ知らぬ間に人を斃す思が籠つてをる場合がであります。恐ろしいものです。私共は、人の言葉を聞いても、その點に深く注意をして言葉の表面よりも、むしろ、言葉の出る根源を深く考へて言葉の意味を了解せねばならぬと思ひます。何か腹が立つと思へば腹が減つてをつたり、何か癪に障ると思ふと金が懐になかつたりしてをることがあります。だから、人の腹を立ててをるのに接した場合には彼は腹が減つてをるのではないか、

金がないのでないかといふことを考へるほどに敏感でなければならぬと思ひます。だからあわてて腹を立てることは出来ぬ。人がものを云うた時、腹を立てるにも、喜ぶにも、ひとつ考へて、いまからこれをひとつ腹立ててやらう、これをひとつ喜んでやらうといふ風に萬事に落着いてやりたいものです。さういふ工合に、ナポレオンが帝位に即いたことなどは、當時の人がやりたいと思つてをつたことを、ナポレオンの手でしたのであつた。しかるにナポレオンがそれをやるとまたそれを斃さうといふものが出る。だからナポレオンはまた、そこから失敗する。かういふことは始終考へなければならぬことであると思ひます。

金銭に汚い人は、他人の金銭上の不徳をよく云ふ。それから生活の問題にいろいろのことのある人は、他人の生活の問題についていろいろ非難をする。だから、昔から「盗人だけだけしい。」と云ひます。或は「盗人繩をさし出す。」

とも云ひます。大抵人の批評をするときは自分を告白してをるのです。だから人の恥をさらすのは、自分の恥をさらしてをるのだ。私共もさういふ點で、自由といふことを考へる時、だれが自由なんだといふことをひとつ考へてみねばならぬのです。その頃の帝王や貴族のやつてをる自由といふものが欲しい。帝王の自由が欲しいなら、自分が帝王になりたいといふことになる。だから、平等になりたいのでない。やはり平等になりたいのです。また、帝王の持つてをるやうな自由といふものは、平等のところにはないものです。不平等のところにある。あまり平等だと自由はない。帝王の持つてをる自由は、不平等のところにあるものです。これらも面白いことです。帝王の自由は人民の不自由によつて成し遂げられる。たとへば大いなる宮殿を建てるには多くの人民の膏血を絞らなければならぬ。印度の方へまゐりますと、タジ・マハルといふ世界第一の建物があります。それは、サアチャハン(一六二八—

一六五八)といふ王様が、愛する皇后アルヂヤマンド・バンヌを亡うた、その悲しみのあまり、こしらへた墓である。白大理石の建物で、その大理石に色の寶石を象嵌せられてある。何でもこれを建てるのに、一萬人の勞役者を使つて二十年かかつた、その總工費は參千八百萬ルピー日本の參千八百萬圓かかつたので、人民は手古摺つた。それが出来上つたら、王はまたその河向うに、黒大理石の自分の墓を建てるための工事に取つかかつた。そして石場が出来た頃、あまりさういふことをしては人民が塗炭に苦しむといふので、王子が人民に變つて王を幽閉した。王は七年の後遂に悶死せられたといふことである。それで、王は志を果すことが出来なかつた。王子は王様のお棺を皇后の石棺の横に祭つた。それで、タジ・マハルに行くと、皇后のお棺は眞中にあつて、王様の棺はその横にある。河向うには王様の計畫された王の墓の礎だけが残つてをる。あの有名な世界第一の建物、タジ・マハルを造るため

には人民の膏血が絞取られてをる。エジプトのピラミッドも王様の墓であるが、あの大きな石を運ぶのに、どれだけの人の勞力がかかつてをることか。ここでも王様の自由をするために、たくさんの人の不自由があつたのだなと思ふ。又、ギリシヤへ行くと、今は廢墟になつてをるが、立派な神殿の柱或は劇場の礎が残つてをつて、大仕掛の建築の片鱗がところどころにある。ギリシヤの自由都市には、多くの不自由民がをつた。ギリシヤの自由都市を思ふとき、あの地中海の沿岸の劣等民族の不自由を思はずにはをられぬ。だから、有名なプラトンの『理想國』でさへ奴隷を豫想してをつた。それから、フランスのベルサイユの宮殿を見ても、ドイツのポツダム宮殿を見ても、民の血が絞られてをることを思ふ。先度支那の北平へ行きましたが、あの満壽山の豪壯な宮殿を見て、随分傲奢なことをやつたものぢやなと思つた。或人は、奈良の大佛は人民の膏血を絞つて出来たものでないかと云うてをつた。

さういふことを云ふと、あらゆる藝術といふものは、不平等な社會によつて生れてをるのです。今日でも優れた時給の茶入などが残つてをる。非常に立派なものがある。今日かういふ立派なものが出来るかと聞くと、昔のお武家は金にあかしてこしらへたのだ。今でもあれ位の金を費したら出来ます。あれ位金を出さんだら出来んものが残つてをるところにもさういふことが思はれる。私は、偉大な藝術品を讚美すると同時に、その裏にたくさん人の自由が奪はれ民が蹂躪されてをつたことと考へられるのであります。さうして、さういふ自由を自分がしようといふならば、自分がその自由を得る時には、自分の足下になつて、その自由をなさしめる者を豫想しなければならぬ。王様の贅澤を思ふときにはその踏臺となつてをる或人間を豫想しなければならぬ。さういふやうな王様の自由といふものがあるところには、所謂平等といふものはないのです。王様の自由は、不平等だからあるのです。少數の人の上のみあるのです。さういふことを考へると、漫然と自由平等と云うてをるが、自由といふ要求と、平等といふ要求とが、矛盾してをるやうに考へられるのであります。

その一下

自由といふことは、どちらにもつけられます。ナポレオンが帝位についた時に、何を宣言したかといふと、信仰の自由を與へると云うた。それが面白い。自由を與へるといふことは、お前等に自由がないといふことです。ああいふ言葉は面白いです。人に自由をやる。この頃になると、自由人などといふ言葉がある。面白いのは昨年でしたか、一昨年でしたか、京都の帝大でマ

ルクス學徒である河上肇氏のことについて問題が起つた。そして大學の教授を止めさせられた。その頃耳新しく學問の自由といふことがあちこちに云はれた。大學は神聖な處である、學問は自由である、大學の講義にはどんなことを云うても自由であるといふ議論がなされたことがある。それから眞宗大谷派で立ててをる大谷大學でも、先年金子君が異安心問題で學校を止め、後に曾我君がやはり異安心問題で學校を止めた。その場合にも同じやうなことが論ぜられた。私はその時分にそれをみて、世の中には頭の悪い人があるものだなと思つた。私はあまり頭がよくないけれども、大學の教授でもしてをる人なら、少しは物がわかりさうなものなのに、學問の自由と講義の自由といふことが混亂されてをるからをかしい。學問の自由を誰も妨げる者はない。家をつて、何を學問してをつてもよい。家でマルクスを研究しようが、デカートを研究しようが、カントを研究しようが、例へばそれが社會の道德の

ことでも、或は心の裏面のことでも、なんでもよい。それを妨げるものはない。シーザーを學んでをつてもブルタースを學んでをつても、釋迦を學んでをつても提婆を學んでをつてもよい。さういふことを制裁するものがない。大學の教授として、何を學問してをつても自由である。けれどもそれを發表するといふ點になると、そこには自由はない。やはり不自由がある。講演會などの場合にみんなが黙つてをるときに大聲を出せば、「だまれ」といふ。だまらにや出よと云ふ。例へば我々には、話することの自由、欠伸することの自由、寝ることの自由、躰することの自由がある。けれども、かういふやうに大勢集つてをる時、眠つてをるのはよいが、大きな聲で躰を出すなら出て行けと云はれるのは當り前だ。その時、日本の國民たる者は躰する自由がある、何だ、と云うたら、日本の國民でも躰することは邪魔になるから出て行つて貰ふより仕方がない。大學の教授が皆右と云うてをるのに、一人が左と

云へば邪魔になるから出て行けと云ふ。道を歩くのに、皆が左側を歩く、それを右側を歩けば困る。さう決つたものに従はにやならん。それに叛くときには排斥せられるのだ。歌を唄ふのは悪いといふことはない。けれども夜中の十二時過ぎ人の寝てをる時に、大聲で歌をうたへば、「だまれ」と云はれる。それはそのはずである。

先度私が國から夜行列車で來る時、送つて來た人が、窓口でわいわい云うてをつた。先に寢臺車に乗つてをつた人が、「馬鹿、やかましい、無教育なもの仕方がない。」と云うた。私は悪かつたからあやまつた。成程無教育だつた。人が寝てをるのに邪魔になる。やはりさういふ時に「俺が話をすることならんといふことがあるか。」と云へば云はれる。寢臺車では黙つてをらねばならぬといふ規則はない。が、靜かに眠りたいといふ人が寢臺車に乗つてをることを考へなかつたのが私達の悪いのであつた。やはりさうすると寢臺

車で大聲を出すといふ自由はないのです。それぞれに守るべきところがあるのです。規則になくても、ちやんとあるのです。

私は講演をすることが度々あるので自然に聲が大きい。東京の高原町の青草舎ぢや隣と壁一重の隔りだから、隣の内緒ばなしが聞える位である。それをかまはんで、大きな聲で、夜になつても長いことしやべつてをるのは、お隣の妨害になると思ふ。靜かにやらんらんと思ふと、町の眞中には自由がないと思ふ。

この頃各所に大きな建物が建つ。三階七階十階のものが建つ。それで日本の法律では地主の権利が何處まであるのでせう。何階まで建ててよいといふ空間の権利の制限があるのか。それとも星の世界まで建ててもよいといふ権利があるのか。地下では地主の権利と鑛山の發掘權とは違ふやうです。空中には制限がないといふものか、ああいふ大きなものを建てる権利があるかど

うか。西の方に大きなものを建てられると東の方が陰になる、が仕方がない。冬向きは干物が出来ぬ。それに煙突など立てられては大變だ。それは人の自由侵害である。それでも自由があると思つてをる。

近代人の自由は他の自由を侵す。自分の自由さへあれば他はどうでもよいといふ風になつてをる。人の権利を侵害して自由と思つてをる。さういふ點で法律の認めてをる自由は矛盾のあるものだ。今日も『萬國史』を讀んで貰うた、フランス革命史のことが、このごろ氣についてをつたから、こちらへ來るなり讀んで貰うた。その中に、國王は人民の生命財産の権利を保障するといふ言葉があつた。生命といふには氣がつかなかつたが、財産を保障するといふ言葉にふと氣がついたら、この歴史家は資本主義の立場に立つてをるのだなと思つた。私有財産の権利がそれほど大切なものかどうか問題である。帝王が立派な建物を建てると、人民から租税を取ると。しかしそれは、人民の

賛成を得たものでなければ壓制であるといふやうなことが論じてあつた。さういふことがわかつてつ、個人が財産を貯めるといふことが、やはり自由でないのだといふことがわからんのだらうか。私はやはり個人がむやみに財産を貯めることは、人の権利を侵害することだと思ふ。今日の人は、自分の私有財産を積むことを自分の権利と思つてをる。私共にはそれがよいのかどうかわからん。一人が餘計物を貯めて、それを離さにやどうなる。限ある物質を少數の者が持つて離さんだらどうなる。その方の権力は益々強くなる。さうも私有財産といふものが大切なものかどうか。これは餘程考へものです。今日の人はやはり私有財産を非常に大事なもの、神聖なものと思つてをる。これは問題ですけど、私にはそれ程神聖なものかどうかわからん。不神聖なものとも、私は斷定しません。が、神聖なものといふことがわからんのです。私はやはりこんな町の真中に大きな建物があるといふことは、それは權

利かもしれないが、さういふ権利は無暴な権利と思ふ。それで今、町に市區改正をやるなら、いくら私有の土地でも土地收用法で收用されるといふやうになつた方がよいと思ふ。それでも現代では漫然と個人の財産権があると思つてをる。が、その人の買った時は、一坪五錢か拾錢の土地でも、政府の方針によつてその土地の價格が騰ることがある。買收價格はその騰つた價格である。それを権利と思つてをる。私などは、あれは原價で買った方がよいではないかと思ふ。例へば日比谷の原は昔は安く政府が拂下けた、その値段で政府が買ってよいわけだ。社會の變遷で價格の騰つたものは高い價でとつてよいものかどうか。しかし、かういふことを云ふと、あなたは社會主義ですか、と聞かれるかもしれないが、さうかもしれない。

一人に自由があるといふことのために、他の自由を蹂躪してもよいといふことは、皆の頭にあるのぢやなからうか、やはり個人主義的の頭があるのぢ

やなからうか。今日の財産の自由といふことは、帝王の神聖と、どれだけの違があるか。歐洲の思想では、初めは自由平等といふことが政治上に起つてきた。丁度その頃唯物論が科學の上に論ぜられるやうになつてきた。そして精神的價值を否定した。價值を否定した物質的な自分がこの個人であります。個人といふものに自由はあります、肉體を基礎とした自由はあります。肉體を基礎とした自由は、親子兄弟別々であります。別々の者がをつて自由を求め。だから夫があまり自由になると細君は不自由である。夫が酒を飲んで法律に背くといふことではない。だから待合へ行つても法律ではかまはない。しかし細君は困る。細君は歌を詠む自由があるからと云うて、飯もたかんで「敷島の」とやつてをつたら夫は困る。又親があまり自由を振舞ふと、子供は困る、子供があまり自由になると親は困る。今日のやうな考の自由は、家庭に持たしてもあまり自由でない。家庭も牢獄のやうだ。なる程さうだ。それ

なら家庭を離れてどこに自由があるか。大體、生れた時から不自由である。二親がある。二親が近眼だと、子供も近眼になる。ところが、近代人は個人の自由をほしがる。

さういふことを思ふと教育上に云ふところの個性の發揮といふことについてもよく考へねばならぬと思ひます。個性とは個人の性質、赤には赤の考、白には白の考、があるといふのです。それを自由に發揮するやうにせしめるといふのが個性發揮の教育といふのです。それもよいでせう。けれども、個性發揮のところに、個人主義利己主義のものが胚胎してをらんか。今日の自由は自動車の自由で、人を漕ぎ分ければ、後の埃はかまはんといふ自由でないか。その現^{あらはれ}が今日の生活の競争です。たまたま進化論が出た。生物は競争、何でも競争です。先度秋田縣で或處の町長をしてをる人に逢うた。その人が、「世の中は何でも競争です。」とわかつたやうな顔をして云うてをつたか

ら、私は、「それが現代人の迷信ですよ。現代人の迷信は自由平等にもう一つ競争です。」と云うた。個人の自由、利己主義、それに競争が出る。競争して人の自由を侵して、自分が自由を得ようといふ自由ある。勝者なら自由がある。落伍者にや自由がない。だから勝りたい、子供の時から勝りたい。それで今の學校では一番になれ一番になれと云ふ。一番は級に一人しかをらぬ。残りの者は一番になれぬ。それをなれなれと云ふ。さう皆が一番になる自由があるか。それから運動會になればどうだ。一番の者は一等の賞典を貰へるが、負けた者は何にも當らぬ。勝つた者は勝つた上に物があたる。随分不公平である。運動會など餘程變なものである。私が京都の眞宗大學にをつた時、第三高等學校からボートレースの招待を受けて、私らがやらうと云うて七人が組をこしらへた。これでボートレースのチャンになつたものだ。運動部からも、應援部からも金を貰つて十日程前から琵琶湖へ稽古に行つた。随分骨

を折つて舟を漕ぐ稽古をした。手に豆が出来ると晩にはそれを開いて、煙草のほつとをつけ、翌朝から又やる。よくやつたものだ。ああいふことは金を貰つても出来んことだ。その日になつた。勝利のつもりで行つた。ころつと負けた。負けた時の恥しさ。笑止さ。勝つた方は萬歳萬歳と云うてをる。私らは自分が負けたのだからよいが、うちの學校から應援に来てをつた者は、旗をどこへやらやつてしまつてしよけてをる。その顔を見るのが氣の毒でたまらない。翌日學校で友達の顔がまともに見られなかつた。それから運動會は嫌ひになつた。勝つた者はよいが、負けた者はラムネも飲めぬ。私はそれからゲームを見に行つて喜んでをる者は、血の循環の悪い者、目玉のあまり動かん者と思つてをる。勝つた者はうれしいが負けた者は泣いてをる。それを見んでをる。勝つて喜んでをる者ばかり見てをれば景氣はよいが、負けて泣いてをる者がある。東京でもどうだ、丸の内や銀座の建物を見てをると景

氣がよいと思ふが、本所や淺草へ行つて見ると、景氣のよい者ばかりでない。つまり、人間は勝つた者ばかり見て賞讃してをる。けれども負けた者がたとあることを忘れてをる。自由はどこにあるか。そして皆勝つて勝つてと云ふ。勝つた者は、俺が勝つたのだ、負けた者はぐづぐづ云ふな。全然強い者に自由がある。お前のやうな弱い者に、どこに自由があるか。さういふ心でをるのではないか。それでよいかどうか。何でも勝つたにやならんのです。近代人は皆さうだ。勝つて勝つて負けるな、競争だ、俺は勝つた、負けたか、やい、さま見ろと思つてをる。大抵の者は勝つた者を稱讃し、負けた者にはをるかとも云はん。それでよいだらうか。さういふところには平等はない。自由はどこにあるか、一人の自由の後に多くの不自由がある。近代人はさういふ自由を求めてをらぬか。近代人の求めてをる自由はさういふものでないか。一人の自由は外の者に不自由を與へてをる。そして平氣でをる。だからさういふ

自由はよく競争をやる。ひつくり返される。不安です。ちつとも落着きがない。人を睨んでをるから、こつちも亦睨み返す。だから氣の休まる時がない。不安である。どこへ行つてもものんびりしてをる者がない。だから近代的空氣に觸れてをる者は、眼付が悪い、顔色が悪い。田舎者はのんびりしてをる。朝鮮の人に對して、「朝鮮の人は皆盜をするさうだが、さうですか。」と聞いたら、「それは内地人に接する朝鮮人のことです。田舎にをる朝鮮人は決して盜をしません。内地から來る人が教へるのです。」と云うてをつたが、或はさうかもしれん。近代的空氣に觸れた者は、利己主義である。利己主義者の生活の標語は競争です、勝つのです。勝つた者は大威張りである。聖徳太子の『十七條憲法』にもさういふことが出てをる。あの頃にもさういふことがあつたと見える。

財有るものの訟は、石をもて水に投ぐるが如し。乏しきものの訴は、

水をもて石に投ぐるに似たり。

かういふ言葉がある、非常に味がある。ああいふ上代においても、お金持の訟は通る、水に石を投げるやうに、すつと通る。ところが、貧乏人が訴へると、通らん、石に水を投げるやうなものだ、これぢやいかんぞといふお心持が現はれてをる。今日の神聖な裁判でも、時にはさういふやうな傾向がある。裁判官に不正なことがなくても、裁判するのに金が要るから、金のない者は泣寢入になる者が多い。金を持つてをる者はよいといふ社會意識に何か間違がないだらうか。今日の個人主義的、物質的人間の自己意識は、人間を一人一人別に考へる。だから、社會といふものは、石ころのやうなもので、獨立自由だと云ふ。さういふ自由といふものは眞であるだらうか。物質的自由は世の中にあるものだらうか。皆因果の理法の中に、必然に定つてをるのだ。我々の自由といふ自由は何か。親先祖の血を受けてこの世に出て來た、

それぞれ五十年七十年の生を過ぎて、又子孫を残して死んで行くのである。悠久な流から云へば、我々は一點です。これを空間的に云へば、蟻のやうな一點です。だから、我々は周囲の關係においても、時代の關係においても、制約がある。それから通れることは出来ぬ。或は意志の自由、意志の必然といふことは随分問題になるけれど、すべてが運命的にきまつてをって、何等人間の活動がないといふことは断定は出来んが、今のすべての關係を離れての自由といふものはどこにあるか。日本の國は今から變つて行くにしても、日本自身の傳統を無視して、いくら、ロシヤの眞似、アメリカの眞似をしようと思つても出来ぬ。鳥は鶴の眞似をして死んだと云ふ。鳥は鳥で行くべき世界がある。鶴は鶴の行くべき世界がある。今からの日本を考へるとき、私共は靜かに自己の傳統を考へ、所謂必然の理法を考へて、そこから一步出てゆくところに、本當の自由がある。かういふ點で、近代人の望んできた自由

は、その望それ自身に缺陷がある。日本は、明治の時代にフランス革命の餘波を受けた自由平等のかけ言葉を眞似して、「板垣死すとも自由は死せず」というた。が、それは空虚な自由です。この頃は自由思想家とか、自由人とかいふ人がある。自由人聯盟といふものもある。しかし、差別の世界は皆因果の理法のもとに、或はすべてが或關係のもとに、ちやんと連鎖がある。突然に起きぬ。ただ思想だけが胸に無統一に出てくるものは狂だ。近代人の自由は狂的ではないか、近代人の自由は、無統一出たための生活をして、それで自由と思つてをるのでないか、我々の生活の自由と云うてをるものは、狂的のものでないか。例へば大學教授はどんな思想を發表しても自由だと考へてをる人は畢竟狂的な思想家である。我々の云爲行動にはすべての關係を離れた自由といふものはないはずである。明日の晩もう少しこのことについて考へようと思ひます。(以上 昭和六年九月十三日)

その二上

人生の苦痛或は不満といふやうなものを、概括的に考へて見ると、儘に
らん、或は不自由だといふやうな言葉によつて現はされてをるのであります。
俗諺に、

ままにならんと飯鉢なけりや

そこらあたりが飯だらけ。

といふのがあります。儘にならんと飯鉢なけりやとは、自由が得られん、自
由が得られんというて腹を立て、飯櫃を投げると、そこらあたりが飯だらけ
になる、といふことです。儘とは、我ま身勝手である。自暴自棄即ちやけ
そになるのである。世の中が徒に汎濫するといふやうなことが、暗に諷せ
られてをる諺のやうに思ふ。私達はいろいろの方にお逢ひして、心の惱をよ

く聞かしていただきます。多くの方は、ままにならんといふ歎を持つてをら
れるのであります。そのままにならんといふことが、普通には外部に向けら
れてをるやうであります。逢ひたい人に逢へんとか、又、食ひたいものが食
へんとか、したいことが出来んとか、ありたくないことに出遇はにやならん、
かういふ場合に、ままにならんといふことを訴へられます。ままにならんと
いふことは、不自由といふことです。ままといふことは自由です。不自由と
いふことは、どういふことを云ふ言葉かと申しますと、普通自分には衷心の
願があります。その願が何の障なしに運んで行けるときに、自由或は自在と
云ひます。自由とは廣々とした障のない世界を認識することです。ところが自
分の願が、或は物のために、或は人のために、或は事情のために妨げられる
ことがある。さういふときに、ままにならん、或は不自由といふことを感じ
ます。だから、不自由といふことには、客觀的の障といふものがある。この

願望が自分自身に向けられることもあり、稍内面的に道を聞いて、内省をする、反省をするといふことになり、自分は腹を立てたくないと願つてをるのに腹が立つ、或は愚痴を云ひたくないと思つてをるのに、それを云ふ。あまり心配の苦がしたくない、ところが心配が出る。又、自分が人に對してすきすきものを云ふ癖がある。これはよくない、直さうと思ふ、かう思つてをるに拘らず、知らず識らず人中へ出てすきすき云ふ。かくて人の感情を害するといふこともある。つまり、自分に對する或一つの願がある。その願を自分自身には満足することが出来ない。といふやうな場合にも、やはり不自由不満といふ感じを得るので。だから、ままにならんといふことは、人に對してままにならんといふ感じを得ますと同時に、自分に對してもままにならんといふ感じを持ちます。そして一面から云ふと、我々は常に望を満したいといふ願を持つてをります。

靜かに考へてみますと、我々の生活の全體といふものが、常に不自由の障を破つて、自由にならうといふ努力をしてをるやうであります。食ふことも、着ることも、學ぶことも、働くことも、皆自由への願望を満す努力であるといふことが考へられる。で、これに對してその願望が満されないときに、悩む、苦しむ。その悩が自分の願とは弱い場合には、ひとつこの障を破つて行かうといふ、一層強い願が起ります。が、願が壓迫される程に大きな障が出ますと、所謂失望落膽し、或は自殺し、或は狂人になり、或は自暴自棄に陥る、かういふやうなこともあるのであります。

かういふやうなことからだんだん考へてみますと、我々の自由といふことは、衷心の願望がそのまま満されて行くといふときの感じであります。これに對して不自由といふことは、自分の願が或物或は或事柄に妨げられるときに起る感情である、と云はれます。さうすると、自由といふことは、主觀と

客観の一致した場合に起る感じであり、不自由といふものは、主観と客観の齟齬した場合に起る感じである、といふことになります。さうすると、自由は主客悠亡とか、或は主客融合した世界であり、不自由は主客對立してをる場合にある。さうなると、自由といふものは一の世界にある境地であり、二の世界には不自由があるといふことに一定せられます。一の世界は絶対の世界、二の世界は對立の世界、相對の世界です。自由は一の世界、絶対の世界にのみあるものであり、相對の世界、對立の世界には、不自由があつて、自由が存在しないといふことは、斷定し得るのです。

さうしてきますと、我々のこの世界をみましても、物質的な基礎によつて考へられた自己、つまり、いつも私が申すことですが、アメリカのホイットマンが申しますやうに、長靴と帽子の間にはさまつてをる者は、今のアメリカ人の自己なりと云うてをるものだ、と申しました。あの長靴と帽子の間に

はさまつてをる自己といふものを、大切にして、その自己の利益を計り、發展を計るといふことになり、我々の自己といふものは、一つ一つ別であります。親子兄弟夫婦をみましても、親子といふものは、一が二に分裂した姿であります。夫婦は、二が一に融合しようといふひとつの姿であります。二が一に融合するところに生存の始まりがある。そして、いよいよそこから生存が高められると、又一から二が分れてまゐります。夫婦關係は相對から絶対への道であり、親子關係は絶対から相對への道であります。だからさういふやうなことを見ますと、この人生的時間的行路といふものは、一から二が分裂し、二が一に融合し、又一から二が分裂する、さうして永遠の時の流を作つて行くやうであります。その分裂した状態においては、不自由があつて、自由はないのであります。親子でもその分裂した身體といふものに基礎づけられてをるときは、不自由があり、自由がありません。夫婦でも、分れてを

る肉體の上に立てば不自由があつて、自由がありません。なぜといふと、親子であります。肉體を基礎として考へるときには、親と子といふやうに、やはり別別になります。親があまり自由をしようと、子が壓迫されて不自由になるし、子があまり自由をしようと親が壓迫されて不自由になる。又夫婦の間でもです。妻があまり自由をすれば夫が不自由になるし、夫があまり自由をすれば妻は不自由になる。要するに、親子があり、夫婦があるといふことは、不自由なことなんです。近來の社會問題など考へるとき、地主對小作人、資本家對労働者といふものは、互に利害相反する、だから闘争があるのは當然である、といふやうに云はれてをります。むしろ、對立した二つの階級は、一方が伸びれば一方は縮まる。だから利益が相反するのであります。利益が相反すれば闘争が起る。だからその點から云へば、小作人労働者對地主資本家の間のみでなく、個人においては、極端に云へば、親子の間に闘争があり、

夫婦の間に闘争があります。兄弟でも、朋友でも二に分れてをればその間には常に闘争があるわけです。ですから、近代の物質主義に基いてをり、個人主義に基いてをる生活には生存競争といふことが悪きものであります。近代人の頭には、利己といふこと、闘争といふことが常に悪きものです。そして常に不自由といふ感情をもつてをる。その自由を得るといふことの努力の上においては、常に敵を斃さうと思つてをるのです。よく云ふことですが、或家に別當がをつた。それが云ふには「家の檀那様と馬とがなくなつて、奥さんと私だけになればよい。」といふた。これは滑稽なやうだが、やはり人の心の底を穿つた言葉である。別當は何しにその家にをるのか、馬の世話をし、檀那様の御用をするためである。ところが自分の仕事はいやだ、別當はいやだ、そして自分の好きな奥さんとをればよい。これは自滅の道です。さうなれば食へんやうになつて死なにやならん。ところがそこまで考へぬ。かうい

ふやうな考が、自己破滅の道を作るのであります。さういふやうな考を持つたものは、奥さんと自分との世になれば、奥さんも死んでしまへばよい、私だけになればよいといふ人です。

私共の日常の生活に、親子兄弟の間でも、ちよつと感情の行違ひが出来たとき、あんなものはいつそ死んでしまへばよいと思ふことがある。何でもここに來てをる人で、極く親しい人ですが、若いとき私の處へ來てをつた人です。私が叱つたら、先生なんか死んでしまへばよい、と云うた。先生先生と云うてをつて、先生が死んでしまへばよいと云ふ、これは本當の心持です。さういふ感じはどういふ人にもあるものです。夫婦の間でも云ひ合ひして怒ると、あんな奴死んでしまへばよいと云ふ。その時は自分も死ぬつもりでさういふ叫をあける。が、それはちよつとの間の感で、時間が経てばなくなると、やはり私の友人が云うたことですが、皆思ふ通りに人間の思ふことが直

ぐに成就したら、それこそ困る。家の親爺なんか死んでしまへと思つて、本當にさうなつたら困る。あんな先生死んでしまへと思つて、先生が死んだら困る。ところが、死んで困つたときには、生きて來ればよいではないかといつて笑つた人がある。さういふやうにうまい工合になればよいが、さうならぬ。ところが、我々の感情の上から云ふと、どうも一人立ちになりたい。差別的に思つてをるものです。例へば、或奥さんの前で、外の奥さんのことを讃めるとあまり氣に入らぬ。主人が宴會などから歸つて他所の奥さんのことを、自分の奥さんの前で讃めると、あまりよい顔をせぬ奥さんがある。そんなによい人なら、あんなその人を貰つたらよいでせう、と云ふ。誰も貰ふといふのぢやない、いい人だと云ふだけなんだ。が、さう素直にはとらぬ。ところが男でもさういふことがある。奥さんがあの人はよい人である、怒らないよい人である、と云ふと、お前もさういふ人のところへ行けばよかつたね

と云ふ。面白いものです。

近代人はよくさういふことがある。俺こそ偉いものと思つてをる。それが人と比較せられると腹が立つ。これは自分よりは偉いものがないと思ふから怒るのである。先度も或處で少々話などを聞いてをる人ですが、「どうか私の生活の上に悪いとお氣づきのことがあつたら云うて下さい。」と云はれたから、「さうですか。あなたにどこかよいところがあるのですか。」と云うたらびつくりしてをられた。悪いところを云うてくれといふなら、餘程よいと思つてをるのだ。問ひかけるほどよいと思つてをるのだ。始めから悪いと思つてをるなら、さういふことは云はぬ。大抵のことはよいと思つてをる。人によつては、他の人の悪口を云ふと喜ぶ人がある。醫者の前で外の醫者を讃めると、いい顔をせぬ。坊さんの前で外の坊さんを讃めたり、學者の前で、外の同じやうな學者を讃めると、變な顔をする。全部とは云はないがさういふ

人が稀にあるのです。かういふ人は、どうしても比較の世界にをるのです。向うが上ると、こつちが下ると思ふ。だから長い板を物の上において、左の端を踏むと右が上る、右の端を踏むと左が上るやうに、人がよくなると自分が悪くなると思つてをる人がある。

さういふ人の胸の中には、どんなものが宿つてをるかと思へば、かう狭いものがある。一人行く道です。お經の中には、「獨生獨死獨去獨來。」獨り生れて獨り死に、獨り去つて獨り來る。というてある。蓮如上人は「死出の山路のすゑ、三塗の大河をば、ただひとりこそゆきなんすれ。」とおつしやつた。一人旅です。肉體の自己といふものを基礎にして考へてみますと、如何にも淋しいものです。一人です。親は親、子は子、妻は妻、夫は夫、一人一人です。それが病氣になるとか、死といふことになる、はつきりしますわね。いくら亭主が病氣になつてをつても、妻は一緒に病氣になれず、妻が死

んでいつても、亭主は死なぬ。一人一人病み、一人一人死ぬ。一緒に病むことは出来ぬ。一緒に死ぬことも出来ぬ。又、平生の想だつて、道を散歩してをるにしても、一つのことを思つて、二人がをられるといふことは、非常に稀なものである。或瞬間には、二人が一つのことを思つてをるし、心が一つの焦點に融けてをることもあります。けれども、普通にはやはり皆が別々なことを思ひつつ手を引合つてをる。一つの寢床に寝ることは出来ても、一つのことを思つてをることは、非常に稀なことです。さういふ點から云へば、やはり一人一人です。そして、一人一人しか行けぬ道を有つてをるやうです。ですから、親子夫婦の間でもやはり競争があるのです。

先度或處で、「お家の年々繁昌になつてくるのは、ここの御主人が大變働のよい人だからです。ここの家庭の明いのは、御主人の力です。」とむやみに主人のことを讚めたら、奥さんが、「主人ばかりでさうなるものでありませ

ん。私も少しは力を盡してをります。」と云はれたので「あ、失禮しました。あなたの力も大へんあります。」とびつくりして云うた。奥さんは自分でなければ承知しない。或家の主人が死んで資産をたくさん残して行つた。「あなたは御主人のおかげで遺産がたんたつて樂な暮しが出来ますね。」と云うたら、「なんのあなた、主人ばかりで貯めたものではありません。私も一緒に貯めたのです。」「あなたが働いたのですか。」「いや、主人が銀行から貰つてくる。それを私に渡す。それを私がむだ遣ひせずうまくやつてきたのです。だから私のお蔭で貯つたのです。」「あさうですか。」主人の働でも自分がひつたくらんならん。「そんなら、主人のお蔭でないのでですか。」と云ふと、「かうやつてをるのは主人のお蔭です。」といふ。が、ひよつと主人を讚めると、「わしがをるから。」といふのです。又或時に、或男の人に、「あなたの奥さんは伶俐で、あんたもそれで機嫌よく働いて、自分の仕事がよく出来るから、いつも

榮えてゆく。全く奥さんのお蔭ですな。」といふと、「なに、家の妻をよくするもせんも男の働です。」というた。やはり細君に手柄を持たすことを快く思はぬ。私の友達で御坊さんですが養子に行つた人があつた。その人が、「養子とは苦しいものだ。家にをるときなど、若さんにお出で下さいと云うて招待に来て、御老院に来て下さいと云はんと機嫌が悪い。又、人が来て年寄は駄目だ、若い者のことだと云ふと、親爺が變な顔をしてをる。むづかしいものだ。だから、御老院様は御老體でお氣の毒ですから、若さんで結構ですからどうぞお出で下さい、と云ふと、さうかな、さうかなと云うて喜ぶ。だからわしは門徒に對しては親爺よりは値打のないもののやうにしてをらんならん。」と云うてをつた。何でも養子があまりに評判がよいと親爺の機嫌が悪いのです。さうかというて、養子があまりに評判が悪くても親爺が機嫌が悪いのです。皮肉なものです、どこまでも競争です。

さういふことを思ふと、ダーウインが殊更云ふまでもなく、我々の心の中には、微妙な競争の心が潜んでをります。だから、そこには自然と叩きあひといふものがある。さういふ場合に一の争奪がある。一を争ふ。ひとつのしかない。近代人の思うてをる一は、狭い。一人しか這入れぬ。坐つてをる場所も狭い。一つしか椅子がない。まだあるかもしれんが、頭がさうなつてをるのです。お内裏さまを飾るとき、夫婦の内裏を飾る内裏の席は狭いけれど一人一人が自分の席を持つてをる。世の中には内裏様の場所ほど自分のもものとして持つことが出来ないで互に奪ひあひをしてをる者がある。夫婦の中に男尊女卑、夫唱婦隨というてをるのは、まだ個人的な差別境に因はれてをるのである。我々は、さうした差別境を去つて絶対境に立ちて夫婦を味はねばなりません。相對の道は狭いです。自分の小さい胸から小さい道を開いてゆく。それが「獨生獨死獨去獨來。」です。

ところが、私共は一人旅といふことを好まぬといふ一面がある。一人旅は非常に淋しいことがあり、非常に自由なことがある。一人旅は非常に自由です。何ら拘束せられない。その時は、廣々としたことがあるが、一人旅は淋しさがある。この淋しさにやはり二つある。所謂寂寥といふ寂を書いた寂しさと、三水に林といふ字を書いた淋しさとです。芭蕉が云うた寂、俳諧の寂、佛教でいふ三昧、静かさ、これは寂です。例へば、芭蕉の句に、

古池や蛙とびこむ水の音

といふ句がある。子規は、これは名句でないと言ったが、子規が今日まで生きてをられたら、あの句の名句であることがわかると思ふ。あれは老人でなければわからん句です。何でもないので。蛙が古池に飛込んだ、その音を聞いたといふことが芭蕉の手柄です。若い者にはそれが聞けんのです。音楽を聞いても、若い間はジャズでも聞く。それからだんだん賑やかなものに飽

いて、西洋音楽ならベートベンでも聞く。日本音楽なら長唄でも聞く。ところが年寄になると、寂しいものがよい。例へば舞樂の太鼓、あれが、どーんと廣い庭に響き渡る、ああいふ音に氣がひきつけられるやうになります。ああいふ音に親しめるやうになつたものでなければ「古池や蛙とびこむ水の音」といふ境地の寂しさがわからぬ。かういふ寂しさには絶對の境がある。だから、そこは廣いです。一人で廣いです。一人で自由なんです。

ところが物質的な心そのままあつて、そして一人旅をすると淋しいといふのは、非常にたよりない何か死にたくなるやうな淋しさです。よく、女の人なら二十二三、男なら二十六七、さういふ時代に、世の中が淋しくなつて、死んでしまひたい、かういふやうな氣が起る。死にたいと思ふ。これは淋しいのですな。さういふやうなことは、一種の人間の生活慾の發動であります。それはやはり異性を求めてをるのです。連合を求めます。女でも男でも

頼ない心が起つたら、異性を求めてをるのですから、細君を貰ふなり、夫を求めぬなりすることです。それを意識的に感じなくても、無意識的でも、さういふ淋しい頼ない心持の起る時は、異性を求めてをるのです。それで或人を戀しう思ふ。それが何かのはすみで思ふ人が得られない。さういふことになると、世の中を悲観して死んでしまひたいと思ふ。かやうにしてヒステリになる。世の中を呪うて冷たい根性になる。白眼で人生を睨む。かういふ人がともすると、あの物質欲に固まるやうな人である。あの尾崎紅葉の書いた『金色夜叉』の間貫一は、ダイヤモンドの指輪に迷うて嫁つたお宮を怨み、自分が高利貸になつた男である。彼にはたしかに近代人の傾向がある。たまに、一人の女のさういふことをみたとき、自分が反動的になつて、世の中を疑ふ、そして金銭といふものに閉籠つて、そこに籠城して、個人主義な専横を極めるといふことをやるのであります。さういふ點で、近代人は若い間

に淋しいといふ心が起るのは非常によいことです。人はやはり淋しいといふ戀心のつく頃の淋しさは結構と思ふ。あの戀心のつく頃の淋しさは、和やかな心です。いくら年がいつてもあの淋しさは、人生に潤いを感じ、暖かみを感じさせる。ところが、かうした淋しさが凝結したやうな、冷やかな人生感を持つやうになると、非常に冷たい固定感にはいる。多くの學問を取扱ふ學者、或は金銭を取扱ふ拜金主義者は、淋しさを知らぬ。だから、もう一つ進んだ戀心を知らぬ。

人間の淋しさは一を求めぬ心、絶對を求めぬ心です。それは宗教を求めぬときの心です。或人は、戀愛は宗教を求めぬ心だと云ひました。さうです。だから、一番宗教にはいり易いのは、春季發動季です。その頃には、よく絶對を見出すことが出来るのです。淋しいといふことが本當に進んでゆくと、寂といふ心境がわかります。その淋しいといふものが時によると、利己的の

「獨生獨死獨去獨來」になる。が、それも一つ進み出れば絶対の寂しさを味ふ境地になれる。所謂不自由の極において自由を味ふことが出来るのです。所謂寂光です。その時の一人は、單なる一人でない。絶対の一人です。だから、その一人は寂かである。にぎやかである。天照大神の心に八百萬の神が顯現ましますやうに、一に立つのです。だから、その心は寂かで、そして廣々としてをります。あの舞樂の太鼓が一つなると、世の中が本當に震動します。あの震動が大千世界に感動してゆくのであります。非常に幽寂な境地です。この境地が、天上天下唯我獨尊の叫に聞えるのであります。だから、この寂しさは、非常に力のある、そして、潤のある心持であります。ここに始めて本當の自由が感得されるのであります。だから、心の自由といふものは、絶対境の味のある人ばかり味はれるものであります。差別の上にくら求めても、それは瞬間的に感じ得ることが出来るかもしれませんが、永遠の一では

決してないのであります。本當の自由を歩む者の道は廣いのであります。唯一の無限の道は、萬民と共に手を携へて歩むことの出来る道路であります。

その二下

自由を得たいといふ欲望は誰にでもあるのであります。不自由といふものは、主観と客観とが、不一致のところにあるのです。だから、自由になるといふことは、主観と客観とが一致することです。その一致するために、客観を主観の要求に合致させようとする。それは、生活の一つの努力であります。例へば、金を貯める、或は知識を擴める、或は水上を行くために舟を造る、空中を行くために飛行機を拵へるなど、客観的に開いてゆく。これは一つの

人生の努力です。悪いことではない。が、さういふことをやつて行くのに、そこには常に不自由といふものがついてゆく。欲望といふものは無限であつて、一つ叶へば又一つ、三つ、四つ、五つ、六つかしの世や。「大無量壽經」の中に「適一有れば復一を少く、是れ有れば是れを少く。」とある。何でも一つ出来ればまた一つが缺ける。帯が出来れば着物が欲しい。着物が出来れば羽織が欲しい。簪が欲しい。皆揃ふと、家が欲しい。家が出来た頃、また先の着物が駄目になる。だんだん望が出て来る。昔の人は臘を得て蜀を望むというた。自由を追うてゆくと、いつも満たされぬ世界がある。

我々はそれを學問の上に見出してゆく。私共は百姓をするとか、商賣をするとか、さういふことは出来んから、自分の好きな、書くとか、讀むとか、いふことをやつて、何十年このかた努めて來てをる。かういふことは、やはり年がよればよる程、面白くなります。そしてわからんことが多くなる。面

白いもんです。若い頃に、ひよつとわかつたと思つてをつたことが、年がゆくとわからんやうになる。そして、知らにやらんことが多くなる。讀みた本がたくさん出てくる、調べにやらんことがどんどん増えてくる。そこにまた學問の面白味がある。高い山に登つて行くやうなもので、どんどん行けば行くほど、向うが高くなる。學問の頂上がないやうになる。いつも、ここまでかと思つてゆくと、非常に高いものが、また向うに見える。また行く。いつも前途が闊く、また高い。さういふところを分けて行くのが、學問の喜びであります。高く登れば登る程、高いものが見出される。そして眼界が廣くなつてまゐります。私共にはさういふ方面で満たされなれないといふことは一つの喜であります。或點からいへば、小さいものに満たされるよりも、満たされたいといふ道を求めて行くところに、非常に大きな楽しみがあると思ふ。が、この道は常に不自由であります。

我々の感ずるもう一つの不自由は、この望の心といふものに制限を加へることである。人に對する欲望、自分の親或は連合、或は友達、或は世間に對する、自分の欲望といふものを、内省する。求めるといふことは大事だが、その求め心は、何を望んでをるか。無茶苦茶のものを望んで、それが思ふやうにならぬというて、不自由だといふ感じを抱いてをることがある。例へば人を排斥するといふやうな願をもつて自由を求めてをる。さうすれば人から排斥されるといふことがついてをる。昨晩も申しましたやうに、自分の娘を姑のない家へ嫁にやりたい。が、自分の家の息子に嫁が欲しい。さうすると、自分の娘は姑のないところへやり、自分の息子に嫁を貰へば、自分が姑になる。矛盾してをる。人間はさういふ矛盾した心を持つてをるので。そして、それが満たされないと云うて泣いてをる人がある。さういふことは考へねばならぬことであります。例へば、あまりろくでもない性質の者が、自分

の連合に、完全圓滿を求め。あこが足らぬ、これが不満だと云ふ。さういふことを望んでをる自分はどういふものか、といふことを考へねばならぬ。徒に向うばかりをみてをると、あれをかうしてほしい、かうもしてくれさうなものと思ひ、そして、向うに對して求めてをりながら、自分は一向さういふことをしてをらぬ。またする能力もない。矛盾してをる。だから、我々は自分を省みにやならぬ。息子が自分の思ふ通りにならぬ、親が自分の思ふ通りにならぬ、妻が自分の思ふ通りにならぬ、夫が自分の思ふ通りにならぬ、と思つてをるときには、身に不相應なことを望んでをるのである。自分を一向検査してみない。だから、我々は常に自分の思を組の上に乗せて、メスで調へることが大切である。出来難いものを望んで、出来んといふことを歎つてをる者がある。既に自分の願に矛盾を持つてをる。そして破滅の道を望んでをる者がある。狭い道を求めてをる。又、狭いと云うて泣いてをる者がある。

だから我々は、自分の願といふものについて、充分に考へて見にやならぬのであります。さういふことを願うてをる自分といふものを考へてみますと、私共は、世の中に對して、あれこれと要求するだけの、何らの權利がないのだといふことに氣附くのです。自分が不親切なものであることを思ふと、人に親切を求める資格はない。或は、自分の行届かない日暮を見ると、人の行届くことを求める資格はない。清澤先生は、「自分は、善だ惡だといふことはすつかり分らなくなつた。善惡のある世界には、身動き一つ出来ぬ自分だ。」といふことを懺悔してをられます。自分は世間に存在する資格のない者だといふやうに、自分の値打が見限られます。さうすると、頭の高かつた者が、その高い頭を下けずにはをられんやうになるのです。我慢の角が折れてまゐります。こつちが零になります。さうすると、どこへでも通つて行ける、持つて行くものがない、空手です。「空手にして來れ。」といふ言葉がある。或

は自力を捨てるといふ言葉がある。或は大死一番といふ言葉があります。そこに虚無の身、無極の體といふ境地が開かれる。自分に求める値打がない。だから、そこに比較的に求める心がなくなる。そこから出るものは、與へられるものを謹んで受けるといふやうな、求め心で、生きたものを受けて行くのです。謹んで受けて行く。詔を承けたまはる。「詔を承けては、必ず謹め。」と聖德太子はおつしやつた。詔を受けては詔を謹めといふやうな心持が生れてまゐります。それが若し求めるといふことになりますと、空虚の世界に和の絶對を見出す。空の世界に、主觀と客觀との二つが對立した時、客觀は、主觀に慙亡した純粹の客觀になるのです。ぢやから、この頃唯物論と云ふが、純粹に唯物とわかれば、それが悟得です。それが絶對です。ところが、今の唯物論者は、唯物論を云ひながら、そこに主觀を交へてゐはしないか。絶對の境地は、唯心でも、唯物でも、どつちでもよいのです。唯の唯の世界で

す。純粹客觀純粹主觀、さうなればよい。或は主觀の世界が、満足されるときに境地に融合ふ。それが一です。自力を捨てる、計を捨てる、あるがまま、なるがままです。親鸞聖人はこれを自然法爾と云はれた。そこに自由がある。小さいものを持出さんのです。持出さんところになる願望です。ぢやからその願望が積極的に現はれると、一切衆生或は十方衆生といふやうな形になつて現はれるのです。阿彌陀如來が十方衆生と云はれる、或は、本門の釋尊が、「今此の三界は是れ我が有にして、其の中の衆生は皆吾が子なり。」かう申される心持は、もう自分といふものはないのです。廣い世界がある。多がある、多は多くです。日本の昔の言葉で云へば、八百萬の神です。大衆がある、民衆がある、それと共に動く。佛教徒はいつも佛の前に告白します。

願以此功德
平等施一切

同發菩提心

往生安樂國。

願はくは此の功德を以て

平等に一切に施して

同じく菩提心を發し

安樂國に往生せん。

平等施一切、平等に一切に施す、かういふときに、平等と云ふ。平等施一切とは、衆生と共にです。「願はくは衆生と共に大衆を統理して一切無碍ならん。」この大衆を統理して一切無碍ならんといふ心で、すべてと打融けてゆく心。そこには無碍の大道があるのです。無我です。近代人の願は小さな道です。自分一人の道で、人と並んで行けぬ道なんです。ぢやからそこに競争がある。無から生れた願は、平等施一切、十方衆生です。皆と並んで行ける道

なんです。その道において自由がある。その自由は妨がないのです。その自由といふものが形を現はして、差別の世界にまゐりますときは、差別の世界の約束を認めます。平等施一切といふことは、それが差別の世界にゆくときは、皆手を取つてゆくのです。人を斃してゆくといふのでない。皆が手を取つてゆく道なんです。夫婦共に、親子共に、兄弟共に、一切大衆が共に、十方衆生が共に、日本が立つて支那が立てない、アメリカが立つて日本が立てないといふ道でない。全人類が共に立つてゆく道、さうした道を求める。だからそこには、利己主義がないのです。利己主義がないから無理な競争がない。非常に広い氣持です。その広い心持で、廣々とした世界を歩んでゆく。この願に生きてゆきますと、所謂人生といふものが、絶対に裏付けられた相對である。ただ絶対の一の境地である。自由といふものが叶ひ、自分の思ひ通りにしたいといふことも叶ひますと、差別の世界に出ても、その思通りを

やらうとする。そこに我まま氣ままがあります。ぢやから、そこには非常に悲惨な血を見るやうな争が出る。そして、自由を得たらひつくり返さうといふやうな、裏から窺ふもののある自由です。だから壘のある自由です。見すかされるやうな自由です。絶対の一到に裏付けられてをる自由、それは心の自由です。絶対を見出したとき、一人旅の寂かさ、その寂の寂かさの境地にはいります。そこから人生を見てゆきますと、静かな心で差別相を見ること出来るのです。さうなると、自分が他人のために犠牲になるのでもなく、又、人が自分の犠牲になるのでもない。共に立つのです。その道を静かに考へる。ぢやからその心から見ると、誰を見ても敵はないのです。斃すべき人がない。斃さるべき自分もない。極く広い心です。一切の人に「おい君」というて手を取る心持です。さういふのが信です。信といふことは、信することです。信する者の生活には又、力があります。自分以外の何物も見ぬ。だか

らさうした人の自分といふものは、一切衆生が自分になる。その絶對の心持のはつきりしてをる人には、或人が腹が減つてをる。その腹の減り工合が自分の腹にひびいてくる。隣の家の人が腹が減つてをるのに、自分の家の食卓にたくさんのものがあれば、わけてやるのである。向ひの人が重病をやつてをると、その苦しみが自分の胸にひびいてくる。すべてのものが自分にひびいてくる。ぢやから、さういふ境地は、「衆生安樂我安樂衆生苦惱我苦惱」衆生が安樂ならば我も安樂である、衆生の苦惱は我の苦惱である。さういふ言葉に現はれる。又維摩居士が、「一切衆生病むが故に我亦病む」というたやうな言葉に現はれる。或は「十方衆生至心信樂欲生我國乃至十念若不生者不取正覺」一切の衆生が佛の世界に生れんなら正覺を取らぬ、といふ心持であります。やはり衆と共に味ふ言葉です。

近代はあまりに自由平等といふことが、個人主義的利己主義的に傾いて來

ました。そこに人生の萍が出てきた。その萍がよほど固定したのが、今日の資本主義です。それで、資本のある者は自由を得て、ないものは不自由です。だから自由の願望を本性に持つてをる生きた人間はこの萍の中にをるに堪へないので。そこでこの萍を破つて出ようとする人間眞正の願望が一時的な形態を借りて現はれたのが社會主義でないだらうか。かやうにみてくると、近代の社會主義なるものは、相當に強い人間的な根據があるのである。近代の資本主義の社會では、資本家も、無資本の者も共に歎いてをる。だから、どうかならにやならんといふことは、近代人の胸に強く湧いてをる考である。個人主義的なこの競争に疲れ、そしてこのどうしても癒されん不安不自由に疲れてまゐりました。そこには虚偽があり、陥穽があり、葛藤があり、疑惑がある。あらゆる不安がそこに來るのです。利己の心から互に排斥します。排斥するところに疑惑の悩みが跳梁します。鬭争に殆ど没頭してをる

現代には疑の晴れた清明な心が味はれぬやうになつてをります。だから、近代人の苦惱の本は無信であり疑惑であるというてよいと思ひます。昨日も或方から聞いたことです。「或人が、これは誰れさんに内緒にしておいて下さい。といふことをいはれた、それで、今までその人を非常に尊い人だと信じてをつたが、そのことを聞いてから、何かその人が信じられんやうになつた。」というてをられたといふことを聞きました。その信ぜられなくなつたといふ心持のきれいなのに感心した。「あの人に内緒にしておいてくれ。」かういふことを殊更云はにやならん、といふところに、やはり云ふ人と一つの暗い陰があるのです。さういふ暗い陰のない人だと思つてをつたといふその人の純な心持が尊く思はれます。私は、すべてのことを公に云はにやならん、どんな秘密でも内緒にもつてをるのはいけなひと思ひません。やはり便所は陰の方にあつた方がよい。便所は床の間になひ方がよい。腐つたものは捨て

た方がよい。腐つたものでも明かにせんならんというて、お膳場に出さなくてよい。すぐに捨てた方がよい。「内緒にしておいて下さい。」と云はねばならんやうな暗い陰のあるといふことは、そこに何らかの疑があるのです。心のきれいな人にはさういふことはありません。私共は、疑のある生活はいやなんです。皆が信じて明い生活がしたい。どんな暗い性格のものでも明い生活がしたいといふ念をもつてをります。若し暗いところをりたいといふ思があるならば、それは一種の病氣です。私共は統一した生活がしたい。近代人の生活は、ばらばらであつて、宗といふものがない。ただ出鱈目です。六感神経の刺激によつて出鱈目に動いてをるのです。統一がない、宗とするところがない。個人主義は宗がない。だから石原のやうです。そこに人間の涙がある。さうなつてをられぬ、どうか統一がほしい、統理したい、といふのがたしかに近代人の望です。個人主義に飽きた、利己主義に飽きた、競争

に飽きた。どうかまとまりたいものだといふ願がある。それが近代に社會主義の起つた本です。社會主義といふものは、恐ろしいものに思はれてをります。けれどもその社會主義といふものによつて、近代は随分導かれてをります。最近出來た信用組合・消費組合といふものも社會的傾向の一つである。信用組合などいふものは一つの相互組合であつて、個人の事業が正金によつて成立つた時代が過ぎて會社組織になつて、ここに證券經濟の資本主義が出來たのです。さういふ風で自然に個人主義も社會化されてゆくのです。人間はやはりただ個人單獨のものでなしに、團體的に動くといふことを好むやうになつた。社會のために動くといふことは、皆に響がよい。だから私は、社會主義の傾向は眞實の世界の願求の一傾向だと思ふ。マルクスの經濟主義など詳しいことは知らんが、私有財産をあまりに過重してをる状態から「有無相通」とお經に書いてあるやうに公有或は共有的に傾いて行くことは悪いこと

でないと思つてをります。夫婦の間や親子の間にあまり嚴肅な私有財産的の考のない方がよいと思ふ。それは假りに、誰のもの、誰の財布と決めておくもよいが、あまり極端にそれに固つてをつては人生に潤ひがないやうになると思ひます。あまり所有權が強くなると、そのために人間は硬化する。さういふ點からいふと共產的といふ考は悪いことではありません。皆が助け合つて相互扶助して行くことはよいことです。有りあまる物を持つてをりながら無い者に分けんといふのはよくないです。皆が分け合つて行くといふ潤ひのある考が國民の上に漲つて來れば、恐ろしい社會革命などは起りやうがないのです。革命の起るのは、社會が不平均になつて、硬化したために、それがひつくり返る時に勃發するのです。いはば革命は生命力が殻を破つて湧出する活動の一種であるといつてよいと思ひます。國家を否定したり、或は皇室を否定するやうな書物を出したり、さうした言論を弄したりする人は相當取

締るのがよい。しかし、いくら取締つてをしても、社会そのものがよくなるにや無限に出てくる。蚊や蠅が出たというて、蚊や蠅を取るのもよいが、その出る本はどこかをしらべて便所を掃除する、或は下水が溜つて腐敗せぬやうにするといふことが必要である。蠅の出る本、蚊の出る本をそのままにしておいて、蠅取を拵へたり、蚊帳を吊つても駄目である。根本的に改正することが大事である。それが今日の大いに考へなければならんことです。出たものを罰することは、ただ應急手當に過ぎない。根本は直らぬ。私はやはりああいふものが出る根本には、止むを得ざることがある、近代の缺陷を補はうとする自然の流がある、所謂絶対の憧憬があれにあると思ふ。しかしながら、私などから見ると、さうした運動をやる人には、個人主義の習慣があまり取れてをらんやうです。科學的社會主義を標榜してをる人の考にも、いつの間にか非科學的個人主義的傾向の潜んでをることを發見するのであります。

す。やはり感情がはいる。そして、偏頗な先入主的の考がはいる。社會を研究すると云ひながら、社會層の一面を見て、反抗的に事をやる。今日の社會運動にはさういふ傾向が見えるのです。同じ社會主義者の内に同志討などの起るのは、眞理への憧憬といふよりも個人主義的競争心が多く働いてをるのでないかと思はれます。物質的思想の上に立つた社會主義は大阪名物の岩おこしのやうなものである。あれは米を固めてするのです。いろんな主義主張を固めるから、少し濕るとばらばらになる。融合うてをらんからです。私は、世の中の一大事なもの、心の融合ふことだと思ふ。心の融合ひのないうちに、無理に外から砂糖やら飴やらで固めても、一時は統一が出來てをるやうに見えても、一つになつてをらんから、その構成の力がなくなれば、又本の通りにはらばらになる。どうしたつて人は絶対の境地を求めて、そこに萬有が一の融合ひを感じることを望んでをる。さうした感じの上で差

別相を見れば、又、一つ一つが分れてをる。それを皆が求めてゆく。その心持です。そこには、我ままがない。互に譲合ふ、「當相敬愛」とお經にある。當に相敬愛すべし。聖徳太子は「和を以て貴と爲し、忤ふこと無きを宗と爲す。」とおつしやつた、その境地です。非常に穩かな世界です。すべて人生の組織は、人と人が打融けてゆくといふところにある。單なる、いい着物を着る、或はたくさんさんの御馳走を食卓に並べる、といふことに人生の目的はないのです。もつと皆が融合うてゆく、衆と共に楽しむ、さうなることを皆が望んでをるのです。

近代は、すべてのことが大衆的になる。これはよいことです。ところが、一面大衆的になるが、一面非常に差別的な傾向があるのです。私共はどうか皆が、絶對の境地を見るやうになり、そして、そこに大衆的に衆と共に楽しむといふところに、自由と平等とが融和された世界を期待するのです。日本は

明治の始めに、フランス革命の餘波をうけて、自由平等を叫んで今日まで來ました。その自由平等がとんだところで行詰つたのです。それが個人主義的な社會主義となつて行詰つた。そこを出にやならんのです。人道的な人で新しい血を湧かし、極端な血を湧かしてをるものがある。その心に同感せられる點もある。私共はたしかにかうならにやならん心を持つてをる。しかし、血を持つて血を洗ふやうになれば、「前門虎を防ぎ、後門狼を招く。」といふ諺のやうになる。そこに靜かな正しい思索を求め、その思索によつて自由といふことを徹底的に考へる。そして、本當の自由の境地を自分自身のうちにはつきり把握して、その上に人生の差別相を見るやうにならねばならぬ。そこに不平等と不自由といふものを深く認識して、その不平等と不自由の中に、自由平等の光を見てゆく、そして、それをそこに現はしてゆくのである。この差別世界の上に、相對世界の上に、絶對の光輝を現はし、絶對の境地に融

和するやうに進んでゆく。その道は広い道です。朗かな道です。前途は實に明い。外のものから覆へされるといふ心配はないのであります。

私が常に自由平等といふことを好んでをります。その生活の中に、私自身を反省するために二晩このことについて考へさせていただきました。皆さんと共に考へさせていただくことが出来て喜んでをります。今度の曉烏會のお話はこれだけにしておきます。(以上 昭和六年九月十四日)

二。熊本九州新聞社にて

その一

私共が人生に於て、種々な悩みを感じます。その悩みを或點から反省して見ますと、自分の思ひ通りにならないといふ事に歸着する様であります。自身の悩みを考へ又折々私に悩みを訴へる人の言葉を聞きましても、人間の悩みといふものは、自分の思ひの通らないことに起因することを思ひます。例へば家庭に於ける悩みを考へる中に、親は子供が自分の思ふ様にならないといつて悩む、子供は親が思ふ様にならないし、又夫は自分の妻が思ひ通りになつて呉れないと嘆いてゐます。また妻の方でも自分の夫が思ふ通りにならないと嘆いてゐるのを見ます。

我々は何か自分の關係者に對して或期待をもつ。それが望みとなり、その望みが充たさるれば平安だが、それが充たされない場合に起る感じが惱みであります。又世間に對しますれば、或は、親類に對し、或は友達に對し、近處隣に對し、同様な關係で惱みを感じます。人が自分の思ひ通りになつて呉れない、またして呉れないといふ時に惱みます。又それが自分の職務とか地位とかに於て、自分の思ひ通りの地位が與へられない時に惱みを起します。また自分の欲しいものが手に入らないと、例へば金の欲しい時に思ふ様に金が手に入らない、或は着物が欲しい食物が欲しいのに充たされない時に惱みが起ります。

お釋迦様は人生の惱みを四苦八苦と申されました。此の事は始終話に出ます。四苦とは生・老・病・死を云ひます。生きる苦しみ、老の苦しみ、病の苦しみ、死の苦しみ、是が人生の四つの大きな苦しみであります。此の苦しみを仔

細に調べてみますと、生の苦しみも、老の苦しみも、病の苦しみも、死の苦しきもその根柢に於ては自分の思ひの通らないといふことであります。自分の思ふ儘に生きられないのが、生の惱みであります。老の惱みといふことも思ひの適はぬ惱みであります。また病の惱みといふ事も、自分の思ひの通らない事であります。それから死の惱みも矢張り自分の思ひの通りにならない事であります。釋尊は此の他に四つの苦しみを云はれてゐます。その一つは愛別離苦であります。愛する者に別れるについて、或は死に別れ、或は生き別れるなど何れも苦しみであります。別れは何故苦しみかといふと、一緒に居たい思ひがあるのに、離れて居なければならぬ事が苦しみとなるのであります。が別れるのが必ずしも苦しみに限つてゐません。或知人は奥さんを亡くして間もなく、第二の奥さんを迎へ此の奥さんが亡くなられました。その當座私は申しました。「あなたも重ね重ねの御不幸で、困つてゐられる

でせう。私も家内を亡くした経験からあなたの悩みに同情します。」と。すると「いや妙なものです。この前の家内の死んだ時は悩みましたが、今度の家内はそんなにはありません。餘り平素から氣に入らなかつたから、寧ろ重荷を下した様な氣がしてゐます、今度死にましてさつぱりしました。」と申されました。斯んな人は愛別離苦ではない。此れも或女から聞いたことですが、此の人は嫁に行つて、二年ばかりして夫が放蕩するので、自分からお暇して歸つて來ました。二年も居つたのならその人の事を思ひ出すだらうと云ふと「いいえ——一向思ひ出しもしませんから別に悩みもありません。」といふ。矢張り斯んなのは別れても悩みのない部類です。何故かと云ふに愛がないから、一緒に居たいとは望まない、だから悩みはないのです。

次ぎは求不得苦である。是は得たいものが得られない悩みであります。種々のものを求めてそれが思ふ儘に與へられない時に苦しい。求めて得ざる苦

しみであります。

その次には怨憎會苦といふ苦しみがあります。怨み憎みを懐くといふ苦しみであります。その怨み憎みとかいふものを懐くのは何處から來るかといふと、矢張り自分の思ひが適はぬ、自分の願ひが適はぬ時に憎みや怒りを感じるのであります。苦の悩みも思ふ事が適はぬから起るのであります。

第四は五蘊盛苦であります。五蘊とは色・受・想・行・識の事であります。色とは物質です。或は地・水・火・風とか元素とかいふものであります。受とは外からものを感じるパーセクションであります。想とは感じを受けた、それを材料として思想を巡らすことであります。行とはその思想を自分の身に現はす意志であります。識とはそれを統率する所の魂の事であります。人間はこの五つから成り立つてゐる。此の五つのものが餘り盛になりすぎるのが苦しみの原となるのであります。身體が盛になり過ぎるのも苦しみであり、感受

性が盛になり過ぎるのも反つて悩みとなります。是も矢張り自分の思ひと、外界とがうまく折合つて行かないから起る苦しみであります。

釋尊は此れらの四苦と前の四苦とを合せて八苦と言つておいでになります。

斯んなに考へてゆきますと四苦八苦といふ凡ての人生の悩みは、一言で言へば思ひ通りにならないといふ事に歸着します。その思ひ通りにならないといふことに就て外的なものと内的なものとあります。外的なのは富貴榮華等に對する不足不自由であります。内面的には自分自身に對しても思ふ通りにしたいと思つても、思ひ通りにならない。例へば朝寢をせぬやうにしようと思つても朝寢をする。嘘のない生活をし度いと思つても嘘をいふ。さういふ時にも矢張り悩みがあります。人を怨んでならないと思ひ乍ら怨む。心から愛さねばならぬと思ひ乍ら愛する心が起らぬといふ場合にも悩みが起ります。

斯様に外部に對し、或は内部に對し、物質に對し、或は人に對し、自分の思ひ或は望みの通らないといふ事が私共の悩みの原です。思ひの通らないといふ事は、我が儘にならぬといふことであります。即ち不自由といふことになりません。その反對が自由であります。自由といふことは、常に自分の思ひ通りになる時の感じであります。自分の思ひが思ひの儘に運ばれる時は自由と云ひます。自由の感じははつきりしないが、不自由の感じははつきりします。不自由といふ事は、思ひが適はぬといふことです。私達はそれで随分悩みます。時には斯んなに思ふ事が出来ないでは、世間に生きて居る甲斐がないから、いつそ死んでしまひたいといふやうな心さへ起きます。世間が餘り自分の思ひに適はないと、其處ら邊りを破壊してしまひたくなる。自己自身を破壊する様な心さへ起つて來ます。これは矢張り自由の欲求であります。俗諺に

「ままにならぬとままばちなけりや、そこらあたりがままだらけ。」

といふのがあります。

凡てが自分の思ひ通りに随つて呉れない。我々はままにし度い。ところがままにならぬから残念で飯鉢投けた。まま鉢投けたら、そこら邊りは「ままだらけ」と云ふのはままにならぬことの憤慨から、ままを投けた。この「まま」は前の意味は自由の「まま」だし後のまま鉢投けたの「まま」は飯のことである。却つて食物がなくなつてしまふ。思ふ儘にならぬから社會を壊さう。自分を殺さうといふ様な破壊思想の終局を現した謠であります。強い誠めの生れる謠であります。詰り我々はままになり度いといふ願ひがあるのですな。それで何かとままにならぬ。皆様にもお考へを願ひたい。皆様の生活の上にあつてどういふ感じが起つてゐますか。ままになつてゐると思ひますか。ままにならぬと思はれるのですか。皆ままになつてゐると思ふ人は少からう。い

つか或女の方に尋ねました。「あなたはこの次に人間に生れて来る事が出来るならば男がいいか女と生れたいか。」そしたら其の人はそれは男がいい女はつまらないと云ひました。何故だと言つたら「男ならし度いことが出来、行き度い處に行ける。女はそれが出来ない。」といふのです。

女から見れば男は自由で、何でも出来相だが、男だつて何も出来ない。男に生れたつてままにはならぬ。男に生れたつて駄目だよ。男だつて不自由だよ。し度い事行き度い事が出来ると思ふ人は少いだらう。大抵の人は男でも女でもままならぬと啣つだらう。嫌ひなものは側へ寄つたつて苦しい。好きな者は側へ来てくれないし、いやな事は相次いで起つて来るし、好きな事は起らない。思ふ儘にならない。さういふ風に云うたり、感じたり、思うたりしてゐる人は相當に多い。そして人間には其の悩みから解脱したい望みが燃えてゐる。其の思ふままにならない不自由の境地から解脱し度い、逃れたい

のは、要するに自由が欲しいからなのです。或時代の人は「我に自由を與へよ、然らずんば死を與へよ。」と叫んだ。九月八日、九日に恰度岐阜に参りました。岐阜の公園には板垣退助氏の銅像があります。夫は明治十七八年の頃當時我が國の若い人達が自由民権を叫んだ。あの頃には自由民権の聲が高くありました。その頃板垣退助氏が盛に自由民権の説を唱へて歩いてゐました。その時に反対意見の者があつて、板垣さんを暗殺しようとした。板垣さんは負傷しながら「板垣死すとも自由は死せず。」と云つた。しかし板垣さんは死ななかつた。自由も死なない。その記念の銅像であります。或人は板垣さんがあの時死んでゐたら良かつたといふ人があるが、私にはどちらがよいか分らぬ。

明治二十二年欽定憲法が發布せられて、明治二十三年に我國最初の國會が開設せられる事になりました。最近普通選挙になると云つて喜んでゐた事

がありますが、普通選挙になつてどれだけ人民が自由になれたか。肉體は死んでも、自由を得たいといふ願は萬人の心の底に流れてをる。これはいくら人を殺しても失くなるものではない。「板垣死すとも自由は死せず。」さうです。自由を望む心は到底人間から無くなることはありません。

最近種々社會の状態を見ると自由を感じる或階級の人達が自由を求め度い心から時によると種々な危険な運動をする、さうした人達を國家が處刑する、いくらさうした極端な思想家や運動家を刑に處しても、不自由な社會であるならばそれを突破しようとする力を抑へる事は容易ではない、自由を求める人間の欲求は非常な強い力を持つてをります。

自由を求める事は命がけのものであります、時によると人を殺し自分を殺し社會を壊すといふところまで延びる強い勢ひを持つてゐる深い欲求です。人間の生の力は此の自由の欲求となつて現はれてきます。どんな小さな子供

でも一つ望んだ事があるとそれを成就しなければ決してきかない。通らなければ泣いたり喚いたりする。自分の思ひを通す自由の心がある。大人はこれをはつきり色々のものの手助けを得てそれが充たされてゆける時になだらかに生きてゆける。それが何等かに妨げられる時にぶち壊してゆかうとします。自由の欲求といふ事は随分強い力を持つてゐます。

自分の主観の欲求が客観の上で成就する時に感ずるのが自由である。この自分の欲求が客観即ち物の爲人の爲妨げられる時に不自由を感じます。志願満足が自由であり外界が自分の思ひのままに従ふ時自由となる。

要するに主観客観が一つに相應する時に起るのが自由の感じであります。それに對して主観客観がそぐはぬ時に起る感じが不自由であります。だから不自由とは束縛の感じであります。何かに括られてゐるのが不自由の感じであります。牢屋に這入つてゐるのは不自由であります。何故かと云ふに時間

の制限があり食物でも着物でも制限されて不自由です。人間性の一番かなへられないのは牢屋であります。學生でも寄宿舎を厭がる、門限があつたり時間に制限があつたりするから不自由なのであります。誰でもさういふものがない處を望んでゐる。自分の外界の規定のある事は儘ならぬからなるべく規定のない處を求めます。

束縛から脱れるのが解脱であります。縛られるのを解いて行く。さういふ事をだんだん考へて行きますと、世の中へのすべての努力は自由への歩みを續けてゐるのであります。商賣にしろ、學問にしろ、その他いろいろな人間の活動は皆自分の思ひを育てたい所謂誓願を具體化して行かう、満足してゆかうといふ努力なのであります。束縛から脱れた自由への努力であります。普通には束縛を感じた時に何處までも客観を替へようとしています。が、もう一步主観の方を考へてゆかねばなりません。自分の客観は主観に相應してゆく

時にでも主観は客観に相應せず、轉じて行く事があります。

假令ば百姓ならば自分の田地を作るものもないものが、せめて自作になり度い望みを持ちます。自作農になればそれで満足して自由になるかと云ひますと、それだけぢや満足せず、病氣になつても食べるだけの餘裕がほしいと思ふやうになります。そして今度は二倍も三倍も無ければ満足せず、一生懸命働いてもつと村で一番の納税者になり度いと願ふやうになります。

客観に満足が得られるやうになると又新しい主観の要求が出てきて不満を感じずるものであります。自分の妻に對してもどうか朝早く起きて御飯の仕度も出来て身仕舞もして、ちやんとしてくれればいいがと思つてそれをまあ叱つたりしてゐる時にやつと出来る、妻がそれを充せば又外のことを望む。例へばもつと働けばよいと云ふ慾が出て來ます。それが出来る、と世の中は一つかなへば又二つ三つ四つ五つ六つかしの世や、一つかなへば二つがほしうな

る。客観に満足しても主観が動く、主観の欲求が出来てそれが満足した刹那また主観が動きます。「丁度よい事は京の町にもない。」親子の間でも夫婦の間でもひよつと仲よくなつて水も漏らさぬ様になつてゐるかと思ふとひよつとえぐれる事があります。解けてゐるのも瞬間で、すつとそれも消えてしまひます。恰度七夕様が一年に一度逢うてすつと別れておしまひになる様に人に對しても物に對してもしゆつととけたかと思ふといゆつと反れる。逢うた刹那は無感覺であつて、自由な時は自由を感じず、不自由な時に不自由を感じる。自由の時の自由を認識するのであります。

人生は牢獄である、人生はままにならぬ、どうしても不自由なんだからどうか自由にあり度いと云ふ事が出て來ます。併し求めても求めても得られぬのが常であります。

自由は物質的な方面ではとても得られるものではありません。それは主観

客觀を越えたもう一步すぐれた處にあります、宗教の欲求は最も深い自由の欲求から生れて來てゐるのであります。人間は不自由を脱れて自由を得たいのであります。宗教はかう云ふ願ひから現はれて來るのであります。

自由民権といふ事が日本に盛に叫び出されたのは明治十年以後でありました。明治十七八年頃に私の寺に若い坊さんがゐました、私は七つ八つで其の人は十七八歳でありました。或時その男が大きな棒で犬を撲つてゐたら村人が何故そんなひどいことをするかと言つてとがめました、するとその男がその時打つのは自分の自由の権利だと云ひましたのを子供心に憶えてゐます。その頃は田舎にもかうした思想が流れてゐました。

日本の自由民権思想を考へる時にフランス革命を思ひます。中世の時代には世の中が固定してゐました。帝王が專制政治をしてゐました。多くの人民は一人の帝王によつて道具の様に扱はれてゐました。キリスト教もローマン

カソリックの形態をとつた時には貴族主義となり、ローマ法王の專制の臣として佛國の王様が國民に信仰上の絶對權を持つてゐたのであります。それで人民は政治上にも宗教上にも常に壓迫されて何時もほがらかな自由の感じを得る事が出来なかつた。が、かやうな階級的な社會の中からやがて起つてきたのが人間的な自由の欲求でありました。そしてそれはあのイタリーの文藝復興となつて現れました。

此の文藝復興は古いギリシヤの人間的な思想へ復歸しようとする欲求でありました。ドイツではローマ法王の壓制に對するルーテルの宗教改革がありました。フランスでは始めボルテールやルソーなどが出て自由の思想を鼓吹しました。ボルテールやルソーは東洋思想の影響を受けました。此の東洋思想は人間の融和を味ふ思想であります。彼等は印度の書物など讀んで此の一切に融和した廣い心持にふれた、そして其の時分のフランスの社

會状態のあまりに窮屈な事を感じて盛に自然に歸れといふことを高潮しました。これがフランスに於ける最初の自由の叫びでありました。ところが此の叫びは非常に壓迫され搾取されてゐた民衆の驚きとなり、生き心がついて一般の人民は相當自由といふ事をはつきり望む様になりました。ぐづぐづして居られない心が起つて来て、今の社會状態が人間のゐるべき状態ではないと知り、人間的な自由を得度いと願ひに目覺めて來ました。年代で云へば一七〇〇年頃、帝王で云へばルイ十四世の時である、ルイ十四世は傲岸な人だつたと見えて、朕は即ち國家だと云うた位の専制君主でありました爲に人民が随分苦しみました。人民の取つたものや作つたものを皆搾取しました。勝手氣ままに立派な宮殿を作つたり、旅行をしたり、狩獵したり、随分我儘をしました。そこで人民は人權を主張したり或は平等を叫んだりしてだんだん覺めて來ました。これはルイ王ばかり自由をやつて我々は束縛せられて居ら

ねばならぬ筈はないと云ふので自由平等の叫びを上げました。人間は自由であるべきだ、王様だけ自由であつて人民が不自由な筈はないと叫びだしました。其の熱が段々擴がつて下層人民の間に流れて行きました。

中世の神の愛は専制の君主にのみ與へられて人民には與へられませんでした。神の愛は搾取階級にのみあつて被搾取階級には與へられなかつた。是ではいけない、神は下々に迄愛して下さらねばならぬと博愛の叫びを挙げました。ポルテールやルソーの考は精神的に考へられて居たが、一般人民には物質的に考へられました。其處で何でも凡ての思想が通俗化される時とんでもない處へ行きます。フランス革命もさういふ處があります。彼等は自由平等博愛と叫んで革命の聲を擧げたが、彼等の見てゐる自由平等博愛は自由と謂へばルイ王の生活を見て、あれは自由だ、王様は自由だ、好きな事が出来る、だが我々は出来ない、斯ういふ筈はない、我々も王様の様な自由を得なければ

ばならぬといつてゐる。

ところが其のルイ王及び貴族等の自由は一般の奴隸的人民が居るからこそ出来るのであつて、奴隸が居なければ出来ないのです。

搾取階級の自由は被搾取階級があつて始めて存在します。被搾取者がなくなれば搾取者の自由はなくなりません。早い話が家庭の内では主人と奥さんが好きな事をする爲に女中がある、女中がなくなれば奥さんがせにやならぬ。下の者から上の者を見てあの人は自由だ俺もあなり度いと思ふ。さうなるには自分と同じ様な奴隸が自分の下に居らねばならぬのであります。自分の代りになる者があつてこそ自分だけが自由になれます。平等にしてゐては得られず、不平等な時にのみ自由が得られるのであります。博愛ならば自由はありません。革命當時の人達の思つてゐる自由平等はボルテールやルソーの云つてゐる考とは違つて居るのであります。

一般人は矛盾を氣附かずに不自由の自由を求めて居ました。フランス革命はこの矛盾した自由の欲求から起つたのであります。それだから人を殺したり自分も殺されたりする様になりました。ダントンやマラーやロペスビール等皆此の矛盾の犠牲になつて斷頭臺の露と消えました。革命當時の自由の欲求を満足したのはナポレオンでありました。彼は望んだ様に自由を得て帝王となりました。然し彼も遂にセントヘレナの露と消えて行つたのであります。ナポレオン三世が帝位に就いたが、是も長續きはしませんでした。斯様に行つたりかへつたりして居る中に、今のフランスの共和政府が出来た様になりました。

先年パリに行つて個人的の自由をこれほどよく互に相妨けなしに味へる様によくしてあると感心して來ました。然し危い處が澤山あります。そこに加はつたのが十九世紀に起つたフランス革命に叫ばれた自由平等の思想に近

代の所謂物質的個人主義の思想が加はり、此處に利己主義の思想が出來、そこへ十九世紀に起つた進化論の思想が加はりました。進化論の思想では今まで尊んで居た人間を獸類並に考へて來ました。中世までは人間は靈的に考へて來ましたが近代人は物質的機械的獸的に考へるやうになつて來ました。

近世のドイツ哲學は、ソクラテスの自己内省の流れを汲んだ、自我の研究から出發しました。だから自我意識の研究が、個人主義的な通俗的な雷同者を得ました。かくして近代思想は物質的個人主義、功利主義、利己主義、競争主義などであります。近代思想を纏めて見ますと、ひとりびとりに別々な自由を求めてゐます。ルイ十四世の我儘な自由を夢みてゐます。個人的であると同時に、他の個人を打超えようと願ふ、それが利己主義であります。互に勝つたり負けたりしてゐるのは競争主義であります。かう云ふ事を考へますと、フランス革命の起つた思想の矛盾と云ふ事に、可笑しい氣がします。

ギリシヤにプラトーンといふ人がありました、彼の著に『理想國』といふ一篇があります、近代のあらゆる思想の根源が、此の『理想國』の上に暗示せられてあるのであります。其中にはプラトーンほどの頭のいい人でも妙なことを書いてゐると思ふ箇所があります。昔のギリシヤのスパルタ、アゼンスなどは都會でしたが、それらの都市はそれぞれ皆獨立した一の國になつてゐます。たとへば熊本國、長崎國といふやうに、都會が國家になつてゐます。ギリシヤでは奴隷を認めてゐます。アフリカの土人を捕へて來て奴隷に使ひ、自分等の自由都市を形造つてゐたのであります。プラトーンの所謂理想國家にも、此の奴隷を豫想してゐるから可笑しい。スパルタもアゼンスも奴隷がなければ、自由が出來なかつたのであります。今日でも大きな家では下男下女がゐなければ家が成立たない。

あれほど自由な國のアメリカでも奴隷を持つてゐる。南北戦争をして、奴

隸廢止を執行しましたが、今日でもアトランダや、ニューヨークの方へ行くと、停車場にでも黒人のベンチだけ特別になつて居り、汽車も黒人のだけ、別な箱がつけてあります。その辯アメリカの汽車は黒人がゐなければ動かないのであります。今日の人間が思つてゐる自由には、奴隸を認めないで得られる自由があるだらうか。だから革命當時の人は皆人を殺して、またやがて自分も殺されて行きました。之は今日の我々に對するよき手本であります。人間の心の底には自由を求め強い欲求があります。しかしその欲求がとんだ狭い處に這入り込むと、却つて不自由を招く結果を見ます。フランス革命に目覺めた自由の叫びの中にも、明治年代に叫ばれた自由を求むる聲の中にも、尊い宗教的情操の芽生を見る事が出来ます。しかしその芽生はだんだん物質的な不自由の牢獄に閉ざされてくるやうになりました。かくて近代人の求むる自由は他人の不自由を豫想しなくては得られぬ自由を求むることにな

つたのであります。自由を求むる欲求は一概に悪い事とは決せられないが、私共の求むる自由に對して十分の反省的な考察を施さねばならぬのであります。そして川を遡らうとする者が却つてその反對に下り道をとると云ふやうな愚かな事がないやうに心がけねばならぬのであります。

(以上 昭和六年十月八日)

その二

自由と云ふ事に就て、昨晩から皆さんと共にいろいろ考へて來ました。今晚も續いて考へて見たいと思ひます。自由と云ふ言葉も思想も遠い昔に見ることが出來ます。釋尊のお説きになつた經典を覗きますと、自由への憧憬、或は自由の天地と云ふやうな事がよく味はれて居り、記されてもゐます。ところが近代になつて、ヨーロッパ方面では、文藝復興或は宗教改革或はフランス革命によつて自由思想が勃興しました。日本に於ては明治維新後、ヨーロッパの自由思想を受け入れて自由民権の叫びとなりました。近代人が考へてゐる自由と云ふのは、物質的な個人主義的な根據に立てられてゐます。だから一人の自由は他の迷惑を來すと云ふやうな自由を求めてゐます。従つて自由を求める所に競争といふ事があります。その自由にさへも自由競争とい

ふ名目が附けられてゐます。自由競争、或は自由貿易、後に至つて藝娼妓の廢業にまで自由廢業といふ名まで叫ばれて、何も彼も自由々と猛烈に自由と云ふ事を望んでゐます。所が此の自由をよく考へて見ると相當に無理があります。

近代人の考へてゐる自由の實現を考へますに、私は自動車を思ひます。私はいつもおどけ半分に、自動車のことを自由人と云つてゐます。自動車は速力も早く進みます。すべての者を拂ひ退けて力強く進んで行く。電車のやうに軌道も持ちません。或る點から云つたら電車より自動車が自由であります。しかし自動車自身の便利はやがて他の者の不便であります。乗つてゐる者は自由を味ふことが出來ますが、乗らない者は自動車のある事によつて多くの支障を感じます。私など眼が悪くから殊に自動車は厭であります。自動車の通らない町に這入るとやれやれと安心します。自動車の劇しく通る町は不安

であります。

私など用事が多いのでどつちかかと云ふと自動車に乗る機会が多いのです。短時間に用を達する必要がある人は便利であります。私など自動車の自由を味ふ機会が多い。しかし自動車に乗つて参ります時は、道を歩いてゐる人の間をわけて行かねばなりません。おとなしく除けてゐる人に泥を飛ばしたり、ゴミをかけたり、瓦斯をかけたり、随分氣の毒なことをして散々な目にあはせて行きます。自動車に乗りますと不快な感じがします。殊に自分が乗らないうちに自動車が如何にも傍若無人な態度で人を除けさす事が権利の如く、自動車をよけることが義務であるかのやうに走つてゐるのを見ると腹立たしい感じがします。若しよけてゐる人を見ては有難いといふ感じでも起せばよいのですが、それも起さぬ人が多いやうです。だから或る場合には自動車が呪はしい心地さへ起きます。

日本に自動車の流行るやうになつたのはまだ僅かばかりの間であります。私が一番に乗つたのは静岡から清水港に乗合の出来た頃であります。其時馬車挽達が自動車を呪うて、自動車の通る路に丸太などを置いたことがありました。私の乗つた自動車もあぶない事に遇ひました。又其の當時東京の知人が自動車を買ひました。君達はまだ乗つた事はなからうから乗せてやらうと云うて私達を朝早く乗せて東京を一週した。千住の橋を乗つて行く時労働者が棒を持つて土手の所を追つかけて来たことがあります。また九州の方面に大分後で乗合が通ひました。宮崎縣の方でも熊本縣の方でも私達が自動車で参りますと石や砂を投げる子供があつたりする事がありました。斯様な事は無理のない仕業だと思はれます。今日では大分馴れて来たから、どんな田舎に行つてもさうした事は滅多にありません。自動車に對して反抗心を起すと云ふことは相當に理由ある事と思ひます。

今年の六月滿洲方面に参りました時、奉天に行つて一日支那人の町を自動車で見物に出かけました。私達の自動車が警笛をならしても群集した支那人は中々除けようとしなかったので自動車は進まれません。それで乗つてゐた人が支那人は暢氣で困る、人の歩く道を妨害すると腹を立ててゐます。私は可笑しくフンと笑つた。「何故可笑しい。」と云ふから「どちらが妨害するのかね——支那人は自分の町を昔から悠々と歩いてゐる。私共は日本から自動車といふ大きな機械を持つて彼等の悠々と歩いてゐる町を荒すのではないか。寧ろこちらが妨害してゐるのぢやないか。」と申しました。それを怒つてゐるから可笑しい。「盗人猛々しい。」といふのはこれだ。道を歩いてゐる時、人道と車道とが區別してある時には問題はありませんが、ごつちやにしてある時にはいづれも通行の権利があるのであつて自動車は歩いてゐる人を除けさす権利はなく又除ける義務もありません。歩いてゐる者も自動車に乗つてゐる者

も共に権利があります。處が自動車の力が強いので自動車に轢いて行かれたら危いから前の者から除けます。黙つて通せばいい氣になつて通る。しまひにはブーブーと吹いてそれを自身の権利のやうに思つて通ります。而も除けてゐる者に塵埃までかけて通ります。別に道を歩いてゐて私共がよけにやならぬ事は無いでせう。それも別に急な用事があつて大切な公の用事でもあるならいいでせう。アメリカでは警察の自動車、消防自動車、醫者の自動車はスピードの制限がありません。外の自動車は除けて通らねばならぬ事になつてゐます。醫者は急病に出かける、消防夫は火災へ、警察官が犯罪者を追撃するやうな場合、そんな自動車は除けてやつてもいいでせう。處が今日の日本の自動車のやうに花見や、競馬見物になど行く人の乗つて行く自動車を一生懸命に働いてゐる人が除けねばならぬ筈はありません。除けねば危いから除けてやる。強い者には仕方がないから諦めて除けてやるのですが、除

けさす権利がどこにあるか。我々は遊びに行くやうな自動車には除けてやらぬでもよからうと思ひます。花見などに行く人は、悠々行かせてもいいでせう。自動車を應用するのに本當に急用で行く者がどれだけあるか。遊ぶのに乗る者も相當に多い。眞面目に働いてゐる者が除けてやらねばならぬことがあらうか。遊びに行く自動車でハネ除けて行くと云ふことが正しいことか。さうした自動車の自由は正しい自由だらうかと考へます。所謂今日の自由競争といふ者にはさうした強者の強制的なところを許してやつてよからうか。さう云ふ自由を振舞ふことは多くの者の不自由を來すこととなります。それならば皆が自由になるには皆が自動車に乗るやうになつたらよいぢやないかと云ふ人があります。此頃は自動車も民衆化して應用出来るやうになりました。タクシーに乗れない人はバスに乗る。大分平民的になりました。處がバスにも乗れない人があります。そんな人はバスにも除けて行きます。バスや

タクシーが澤山になつたらよからう。澤山になつたら今日のやうな自由はありません。アメリカでは四人に一臺の割に自動車があります。ニューヨークではあまり便利ではなくなつてゐます。英國のロンドンでは狭い町がありますが、表通りもあまり広くありません。先年私がゐた時或日午後五時に日本の大使館に行く約束があり、或る處で四時半頃まで話して急いでタクシーに乗りました、處がコンコルド街まで行くと自動車が動かない。まるで葬式のやうです。悠つくり悠つくり行きます。急いでゐるので運轉手に約束の間があるので廻り道でもいいから急いで行ける通りは無いかと云つたら急用事があるなら歩いて下さいと云つた。恰度銀行會社の退けの時間で皆自動車に乗つて歸るから街一杯が自動車で埋まつてゐるのです。かうなつて來ると自動車も自由ではなくなります。

熊本も自動車が殖えたがそれほどにないからまだ便利です。澤山の人が利

用するやうになると不自由になります。少数の人の享樂にはいいが多くの人の時には不自由になります。汽車では一等・二等に乗ると相當に豊かで自由であります。三等は窮屈で不自由であります。段々等級を上へ上げよう、三等をよくして一階級の汽車を造つたらよからうと云ふものがあります。下關の連絡船はそれが實行されてゐます、然しかうすることは、一等の客が自由を無くすることです。然し平等となると自由が出来ません。一・二等の客が自由を得られるのは、少数の人が一・二等にゐるからであります。皆が一・二等になるならば、一・二等客の自由はありません。だから一・二等の自由は多数の人を三等に押籠めて行く場合にのみ實行せられることでもあります。自由をするものは不自由なものから恩恵を蒙つてゐます。そしてそれを當然の権利のやうに考へてゐます。建築などでも矢張りさうです。地積きの地面を持つてゐる力のあるものは三階・五階・六階からの家を建てます。隣のも

のは陰になつて迷惑します。

地主が何尺上までその権利があるのかハッキリしません。地面の主であつても空中の主ではない筈です。地面さへ所有してゐれば空中はどこまで上つても自分のものであると思つてゐてよいのでせうか。飛行機だと何處の家の上を通つても、権利侵害にはなりません。さうなると何處までが自分の権利かわからなくなります。高い建物は近所が困るが建てるとは云はれませぬ。それで諦めます。どう思ふかと云ふと隣の家が貧乏して呉ればいいなどと思つてゐます。隣の家が貧乏するといふなど云ふのが淺ましい思ひではありませんか。さうなると大きな建物を建てた隣の人は同じものを建てるか、より以上なものを建てるか、然らずんば退却するより外はありません。

強者が進めば弱者は退却することになります。昨年春私の家に古い木材があつたので島の横に茶室のやうなものを造らうと大工に頼みました。木組

みして愈建てることになつて、石屋が土臺を造るために地面の處に仕事に行きました。處が隣の七十になる爺さんが来て田が蔭になると云うて石屋に怒ります。石屋が慌てて歸つて来て隣の爺さんが此處に建物を建てさせないと云うて怒つてゐますと云ふ。では今日は止して下さいと云うて石屋を歸しました。法律的に云へば自分の地所に自分が家を建てるのに遠慮は要らぬ筈ですが、しかし七十にもなつた爺さんが怒つてゐるのに、無理に無くても有つてもよい建物を建てるにも及ばぬ事だと思つて止めました。折角木組みまで出来たものですから御建てになつてはと大工が云ひましたが、それを建てる時隣の田に蔭を印しないと云ふ事は出来ない。法律上の権利といふ事でばかり突つ張つて行く氣にはなれません。處がさう云つてゐた爺さんがその秋に死にました。死んだから建てもよささうに考へられますが、爺さんの息子も意思を嗣いでゐるだらうと云ふので、建てないで置かうと云うてま

だ建てずに居ります。

そんなに考へると大きい家が建てられなくなります。親鸞聖人が大きな寺を建てるなど申された御心持も察せられます。汽車に乗つて居つて一人が自由をすれば片方が不自由となります。それが近代の文明の利器に於てハッキリそれが味はれます。自由は平等ではない、片方に妨げするのであります。殊に近代のラヂオや蓄音機なども随分迷惑なものであります。廣島の親類の寺の隣にカフエーがあります。聞くに堪へないやうな歌を朝から晩まで鳴らしてゐます。喧しいものです。子供など勉強が出来ないと云ひます。私が一寸行つた時でも何だか落つきません。然し之を制止する事は出来ません。七月、朝鮮の群山といふ所の府廳の樓上で府の主催の講演會が開かれました。其の横にデパートがあります。大きな音の出る蓄音機を鳴らすのでこちらの講演がよく出来ません。向うの蓄音機がこちらを妨害します。處が向う

の権利だから止められない。こちらの話は臺なしになつてしまひます。今年の春、呉の或る寺で講話をしました。その寺の横に兵隊さんの宿があつて蓄音機を鳴らしてゐます。それで幹事の人が暫く止めていただけないかと頼みに行つたら、講話のある事は知らなかつたと云つて止めて呉れませんでしたから無事に講演は出来ました。が、かう云ふ場合にこちらの方から止めさせる権利はないのであります。兵隊さんには人間的な情緒があつたので心よく止めて呉れました。

近代人は押が強く、人の迷惑など構はない。熊本の酒場の隣などさぞ迷惑でせう。近頃音響に就ては日本はするぶん亂暴です。ドイツは街に向つて音響を發することを禁じてゐます。今の日本では音響に就て制限がありませんが、いづれ止めさせねばならぬと思ひます。街を大きな聲して叫ぶと警官が咎めるがラヂオは咎めない。不備なことでありませう。さう云ふことを制限す

る法律を定めねばなりません。

よく汽車で旅行する時などに見受けることですが、山の端に賣藥の廣告などが出てゐます。俗悪な廣告が出てゐます。あれも自由でせうが、他の多くの者があるによつて不愉快を感じます。今日ではあれは随分ひどい。

自由だ自由だと云うてゐます。権力金力腕力のあるものが自由を擅にすればするほど、貧しいもの地位の無いものは立つ瀬がなくなります。近代人が思つてゐるやうな自由は恰度フランス革命當時のルイ王の豪華な暴君的生活振りを得たいと望んだと同じ事を望んでゐるのではありますまいか。今の社會の踏み躪られてゐる貧しい階級のものが平等と云ふ感じから俺も自由を與へられたいと金持や権力を以てゐるものの自由を欲しいと思つて居るのであります。

得べからざるものを得ようとする時に苦痛があるのであります。之は自由

を求めて自己破滅をし、その間から又自由を求めて自己を破滅してゆく道程であります。斯様な苦しい道程を経て初めてすべてを破壊せられた處に絶對自由の境地が現はれて來るのであります。互ひ互ひにより合つてゆく社會では一人で思つてゐる様な自由はありません。其處に互の契約といふものがあつて越ゆべからざる線があります。それを越ゆれば自己破壊になります。かういふ契約を無視して行かうとすれば約束を破るか、約束した自分が破滅するかの一方に陥ります。約束が自己の表現であるとすれば要するにそれは自己破滅になるのであります。法律や宗教や道德の凡ての規範は一寸見ると外的に自己を束縛する窮屈なものやうに考へらるるがその根柢をしらべてみれば凡て自己自身から生れ出た約束であるから決して窮屈に感すべきものではないのであります。自己以外にある契約と思へばそれが束縛に感ぜられません。自分自身のことでも過去の事や未來の事が現在の自分と別のものとして

考へられる時には矢張りそれが外的の地位に立つて自分を束縛することになります。

「我ものと思へば輕し傘の雪」といふ古人の發句の境地は此間の消息を洩したものだと思ひます。なほ一段進んで考へてみれば、過去未來の自分が束縛であるのみではなく現在の自分までも束縛であるといふことが分る時に其處に自由があるのであります。此の境地が佛教にはゆる無我の境地です。

人生には束縛があります。金があれば束縛を感じ地位を得れば束縛を感じ結婚すればそれに束縛されます。今から三十年前私が結婚しました、暫く經つて清澤先生に御目にかかりました。その當時先生は三河にをられました。結婚の案内をしましたが別に祝ひの手紙も下されぬ。一寸普通の師と違ひます。非常に私を愛してゐられたのですが、その弟子が結婚したが何とも云はれない。暫くたつて逢つても何とも云はれません。何度も云うたら貴方も係

累を増しましたねと云はれました。別に目出度くもないと申されるのであります。

人間は係累を増す事が好きなんです。自分で係累を拵へてその中へ自分をはめ込んでゆきます。其の時人がはめ込んだと思へば不自由であります。自分が好んではまつたのだと思へば自由であります。

物を持ってば其處に束縛を感じます。東京や大阪に居るルンペンには自由ですが、或る點から不自由であります。彼等は好きな酒も呑めん事が、好きなたべものも食へぬ事があります。ルンペンは家を有たぬから可哀想だ北海道の開墾地に移住せしめましたが、彼等はこんな窮屈な家など住はれるものではないと云つて又東京へ歸りました。金が儲かりや宿へ泊り、無けりや橋の下に寝たり、随分面白いらしいです。アメリカでも之に類した話をききました。ポートランドにゐる私の知人がアメリカルンペンを相手に質屋と

古てやをしてゐる人があります、その人のいふのを聞きますと、森林地帯に這入つてゆく労働者は最初大抵皆裸同様になつてそこへ這入つてゆく、来る時にはよつほど金をもつて来て汚ない着物を脱ぎ捨て洋服や何かを買つて立派な紳士になつてホテルに泊り込む、一週間程滞在して贅澤な日暮しをして金を皆使ひ果し着てゐた着物を預けて再び裸同様になつて山へ這入つて行く、それから二ヶ月程たつて又山を出て同じ事を繰返してゐるさうです。彼等にはかういふのが自由なんでせう。

職が無けりや困りますがあれば又それから離れられぬ不自由があります。子供が出来れば縛られます。人間はだんだん自由がなくなり、金があるからよからうと思ひますが、あると却つて不自由な事もあります。物を離れなければ自由はありません。親子・夫婦・兄弟皆から離れる事が出来れば自由になります。併し血のつながつた者から離れられません。其處から子は三界

の首枷くわというたものであります。仲々なつか離れられませんが。そんな事から獨身どくしんを願ふものがあります。獨身どくしんになつても親おやがあり自分の肉體にくたいにも束縛そくばくがありません。絶対に自由じゆうはありません。束縛そくばくがあります。一面我々は自由じゆうを望んで居りながら又不自由またふじゆうを望んでゐます。

人生じんせいのいろいろな事を考へますと自由じゆうと束縛そくばくが兩方りょうほうあります。一方いほうに自由じゆうがあれば一方いほうに束縛そくばくがあります。金かねがあつても金かねを持つ不自由ふじゆうがあり、妻つまをもつても不自由ふじゆうがあります。金かねのあるものは無いものに比べて自由じゆうでありませんが、有つて居れば有つて居るで其處そこに又不自由またふじゆうがあります。職業しごくも無けりや困るといひながら、職しごとに就けば就いたで又そこに束縛そくばく不自由ふじゆうがあります。エマーソンの言うたやうにコンベンション、即ち「むくゆる」「つぐなひ」であります。佛教ぶつぎょうの中にこんな事を現はした話があります。或る所へ綺麗きれいな娘むすめが一夜の宿やどを求めて來ました。「貴方は何處のお方か。」と

きくと「私は吉祥天きつぎょうてんというて幸さいひの神かみです。」「ではどうぞおはいり下さい。」と懇ねんごろにもてなして奥おくの一間ひつまに休やすませました。暫しばらくくすると又御免ごめんなさいと云うて來る人ひとがあります。誰たれかと思おもうて出てみますと醜みにくい顔かほした厭いやな女おんなであります。「貴方は。」ときくと、「先刻私せんこくわたくしの妹いもうとが來てゐる筈はずです。」と云ふから、そんな人ひとは一向見いっかうみえませんと云ひますと、いや來てゐる筈はずですと押強おしつよく云ひます。「貴方はどなたか。」とききますと「私は暗黒天あんこくてんと云うて人間にんげんに災わざはひを與あたへる神様かみさまである。」と云ふ。それなら尙なほそんな妹いもうとは來てゐないと云ひますと、「先刻吉祥天せんこくきつぎょうてんといふのが泊とまつた筈はずだ、あれが私の妹いもうとである、あれの泊とまる處ところへは私も一緒に泊とまる事ことになつてゐるのだから、今夜は是非泊とまめて貰もらはねばならぬ。」というて拒こほむのにもかかはらず、すんずん這入はいつて來てしまひました。此この話はなしは人間にんげんの幸福しあうふくの裏うらには不幸ふしあうがある、自由じゆうの裏うらには不自由ふじゆうがあるといふことを偶ぐうした話はなしであります。自由じゆうと不自由ふじゆうとがあるならば、その一つの

取る事は出来ません。之は考へものであります。常にその事を思はねばなりません。善い事の半面に悪い事があります。妻をもつていい事がある代りに束縛があります。職業を得ていい代りに束縛があります。それを確かり用意覺悟して居らねばなりません。

若い人は結婚しても豫期が強い爲、こんなではなかつたといふ様な事になります。此の頃の少年少女の雑誌など見ますとスキートホーム、甘い生活甘い事を書いてありますので豫期が多いから失望します。始に逢うた時には甘い言葉をかけられるが、腹立てて怒る、愛がさめたとなり、ぢや別れようかとなります。善い事の裏には悪い事があります。それが承知ですか。吉祥天をとめたら暗黒天がをる事が承知でなければなりません。

人生は束縛繫縛で身動きがなりません。十重二十重縛られて居ます。不自由と自由といふ事をいひますと、私が考へますと倫理學上の自由論と必然論

とを思ひ出します。之は我々の毎日の生活意識と云ふものは自分の自由で出来るのか或は必然的に動かされるのかといふ議論であります。

我々のやる事が随分自由で或は右或は左とやります。何をやつても自分の責任とせねば道德の基礎が成り立ちません。それを二面から見ますとさう自由には出来ません。個人が社會を作るか社會が個人を作るか、環境が人を作るか人が環境を作るかといふ事は容易に決められません。社會が人間を作るといふ處に必然があります。人間が社會を作るといふときには必然でなく自由です。必然がなさしめるといふ場合には我々の道德的責任はない譯であります。盗人が物をとつてもこれは環境がさせた必然だ、嘘言を云つても自分が言つたんぢやない必然だといひ、姦通も環境がさせたのだといふやうになりますと、すべてが必然であつて自由はありません。何するものも環境がかくさせた、さういふ具合なら無責任であります。人間には教もいらぬ道德

もいらぬ、之程に極端に必然論をもつて行く譯にはいきません。だからと
いうて自由意思のみで世間がまはつてゆくものではありません。絶対の自由
論も絶対の必然論も成立しません。そこで自由と必然とが双運されてゆかね
ばなりません。

清澤先生がかつて『自由と服従との双運』といふ論文をお書きになつて我々
に教へて下さつた事があります。社會は必然ばかりでなく自由があります。
許された範圍に自由がありますが、これには限界があります。限界に守られ
てゐる人には自由がありますが、限界をはつきり見出しきらない人には不自
由があるといふ事を考へてみます。自由と束縛との限界線がはつきりしてゐ
ない人には無暗に不自由の感が多くして不満不平の念がやみません。例へば
自分の金入れの金は使つていいが人ののは使つてはならない事をはつきり自覺
しない人は不自由でありますが、それを自覺してゐる人は自由であります。

人は世の中の約束に相應してゆく時に自由があつて、約束に反く時には不
自由であります。佛教では因縁和合と申しまして自由と必然が織り出されて
世の中が進展してゆく事を説いてあります。だから私共の生活は自由と服従
の双運でなければなりません。よく主張しよく服従する所に我等の生活があ
るのであります。服従のない自由もありません。自由のない服従もないので
あります。若しそれがあるとすれば、そこには無理があるので、それ
自身破滅の道をとります。

眞實の生活には自由と服従が常にあんばいよく調和してゆくのでありま
す。絶対自由の境地に入つたものはこの相對の上の自由と服従をよく運んで
ゆく事が出来るのであります。

通俗的な例をいへば、この席で欠伸してはならぬといふ事は、入つて来る
時に必然的に思ふのです。だから欠伸せぬ人には自由があるので、する人に

は却つて不自由があるのであります。茲へ来て欠伸の出来ない事を束縛とは考へません。承知して居ればよいのです。子供を抱けば小便をかけられる事は承知しなければなりません。金を借りる時には返す事を承知しなければなりません。我々が自由で選ぶ道に束縛を感じるならばそれを越えて行く覺悟を持たねばなりません。

老いたり病んだりする事も亦悲惨であり、不自由ですが、しかしだんだん人間の没落期にはさうなるのが必然です。そこに藥を飲んだり若返り法などしたりしてゐます。けれど畢竟必然であります。その束縛を承知してゐればあまり束縛も感じません。死といふ事は厭な事です。最も不自由な事です。處が最も不自由と思ふ事が必然な事で避け難い人間の約束だといふ覺悟が出来れば死に對しても自由であります。不自由を不自由と呑み込んで相應してゆく事が自由であります。

佛様は所謂自由と服従とを双運してゆく御方であります。王者の自由は破滅の自由であります。一時的の自由であります。不自由を根柢として自由の感ぜられた自由は永遠のものであります。佛様の感ぜられる自由はこれであります。

佛教では此の世の事を考へるのに萬物相關の理と萬物一體の理と兩方面から考へます。萬物相關の理といふのはすべてのものが相互に依存してゐるといふことである。若しこれを時間的に云ふならば、吾々の此の一身といふものは親に依つて與へられました、その親は又その親といふ具合に次々に親は又その親によつてだんだん逆上つて行きますと、無限の時間のものからなつて今日まで連續して居ります、そして私の後の子孫といふ事を思ひますと、又子から孫とだんだん連續して行つて居ります。それで此の世の中には獨りほつねんと存在する一個人といふものはありません。

個人はその祖先によつて制約せられてゐます。だから我々の一舉一動といふものは先祖代々からの必然的の制約に動かされてゐるものであります。さうして又永遠に子孫までを制約して居ります。

生活といふものは決してすつかり無關係のものから來るものでなくして親代々の氣が根柢となつて又新しいものが出來て行くものであります。故に我我には生れて直ぐから本當の自由といふものはあるべきではありません。又これを空間的に考へてみる時に私共は人間相互に無關係で單獨に生活してゐるものではありません。先づ私達の住ひとか着物とか食物とかいふものを一つとつて考へて見ましてもさうです、たとへば今日の日本の住宅で見ましても木材の中には鴨綠江から來たものもあれば、アメリカの木材もはいつて居ます、又家具にしましても獨逸やアメリカの製品も這入つてゐます。又着物にしても毛織を着てゐるとしますと、その毛はオーストラリヤのものもあ

ればカナダから來たものもあるといふ具合です。又、綿類を着てゐるとすれば、その綿は印度やアフリカの土人の手に作られたものであります。食物は百姓に作られたにしても印度から來たもの、アフリカ或はメキシコの百姓に依つて作られたものもあつて、單獨で簡單に出來るものはありません。或は着物の染料にしてもその染料は英、佛、米、獨といろいろな國の染料もはいつてゐるのであります。又食べ物物の點につきましても私共がたべる林檎も九州のは大抵朝鮮から來るのや又青森、北海道から來たもの、それから、バナナは臺灣から、それから珍らしいものなら臺灣のマンゴーも來るし、或はパイナップルも來ます、ブラジルからコーヒーも來れば、ハワイのコーヒー、アメリカのメロンも食べれば、かくして各國の生産物が我々を養うてゆきます。かういふ様な具合に考へますと、我々の生活は周圍と一時も無關係である事は出來ません。細かく考へますと、我々の生活は久遠劫の昔から時の流れ

に制約を受けてゐると同時に、全地球の人間はおろか猶ほ進んでいへば禽獸、蟲、魚類に至るまでの制約を受けてゐるのであります。太陽の光線、星の運行すべてに影響を受けてゐます。

今日は何かむかむかする日だと思つてゐますと温度が増して蒸し暑い風が來ます。そんな天候の影響を受けて悩み、又喜ぶ事もあります。我々のこの生活といふものには自由といふものは殆どないのであります。私共の内心が或る願を起します時に、その願が時間的に空間的に受けてゐる制約をはつきり諒解し、その制約を内に入れた願ならばそこに自由があります。然し若し眼が狂つてその時間的な空間的な制約をはつきり認めないで、知らないで願ひを起しますならば、其願ひは成就するかも知れず、しないかもしれせん。其空間的時間的にうけてゐる制約をはつきり掴むといふ事はなかなか容易ではありません。それをはつきり見る智慧のある人ならば、それを土臺として

望みを立ててゆく事が出来るならば、必然を越えて必然をつくり出す程の力を持つてゐます。しかし其時間的な空間的な關係をはつきりと認識するだけの智慧のない者が願ひを起しても、其願ひはなる事もあるしならぬ事もあります。ですから吾々の前に自由が感ぜらるる事もあり不自由を感じる事もあります。若し此時間的な空間的な制約のある事を思はないで、始めから無制限にその制約があるとして自由を願ふのは無謀であります。さうした人は不自由の中に悶々するより外にありません。

萬物相關といふ事を考へる時に私共は牢獄の中に繋がれてゐる様なものであります。時の繫縛の中に空間の繫縛の中にくくられてゐます。其處には絶対の自由といふものはないのであります。吾々はそこに運命といふ様な事も考へます。或は業報因果といふ事をも考へます。其點からいふと何等活動する力のない只機械の様におされて動いてゐると感じる外ないのであります。

す。然し私達はそれに満足出来ない心持があります。其束縛の中にちつと沈んでほられない。それが苦しみであり悩みであります。時にはこんなに縛られては生きてゐる甲斐がないと思ふ事すらあるのであります。それは何かそこに不自由なものがあるからに違ひないのであります。身に合はぬ着物を着た時に幾度も體をゆすぶつて見る様に、着其合の悪い蒲團を着た時は身悶えしてゐる様に、吾々が頭の中に悶々して悩むといふ事はどこかに不自然なところがあるからであります。我々はかやうな束縛から解脱し其束縛から突破してゆかうとします。其望みは繫縛を離れ、不自由を離れ、くくられが取られ、廣々とした世界に出たい願ひであります。さういふ願ひが人間の心に必然にあるのであります。

個人主義的な社會主義の考では萬物が皆制約せられつつありました。個人的自由は認められないのであります。然しこの社會主義といふものもそ

れだけでは打融ける期かな自由はありません。其社會主義からも一歩進んだ時に萬物一體の世界に到達します。制約したり、せられたりするのぢやなくて互に一つに通ひ合つた世界、そこまで行かなきや絶対的自由は考へられませんが、とけ合つた世界が認識せられる様にならねば自由といふ事はないのであります。其處がはじめて最後のより場であります。

一人で定めた世界にも落ち着かないし、皆が寄り合つて相談する世界にも落ち着かない、も一歩そこを割つて出た處に一の世界があります。「一如の法海に眞身顯はる。」と親鸞聖人が申されたのは此の味ひであります。其萬物一體の世界に心が出た時に始めて自由を感じます。親鸞聖人が仰有つた様にただに親子一體夫婦一體であるばかりではなく、すべてのものと一體である世界です。凡てのものと一つにとけ合ふ、其處には互の氣づかひも氣苦勞もありません。「我笛吹けども人踊らず。」でなしに「我笛吹けば人踊る。」の世界で

あります。我々はこの世界を望んでゐるのが即ち自由を求めてゐる望みであります。

我々が一の世界を憧れてゐるのは、一の世界がまねき寄せるからであります。此處へ出て来いとまねきよせる世界があります。我々が個々別々の世界又は萬物相關の世界からも一歩進んでとけ合ふ、一つになりたいといふ欲求にめざめてくるといふ事は、その一體の世界が我々を呼びさましてくれるのであります。

普通人は我々の理想を自分で作つたかの如く考へますけれども、プラトンは其各自の理想即ちイデアといふものは、各自の心に起る前に久遠の昔からちやんとあるのである、我々の意識しない前からあるのである、それが記憶から呼び出されたのに過ぎぬといつてゐます。我々が自由を願ふ事が自由が我らをそこへ呼びさますのであります。是は面白い考へであります、それを

宗教的に教へられる時、我々が佛の心を念ずる様になるのは佛が我らを念ぜしめるのであります。

佛を呼ぶのは佛に呼ばれたのであります。佛に會ふのは佛の心が我々をして會はしめ給うたのであります。こちらが始めて會うた挨拶すると、いや始めてではない、とうから待つてゐたのであるといはれる。我々が人との隔てを感じた時に悩む、どうかこの悩みの無い様になりたい、もつと自由になりたいと願ひもしますが、不自由になるて自由を求めるのはその一つのからくりのいたす所であります。一つの世界が別れ別れになつて會へない時にそれが我々に悩みとなつて現はれます。必然は一の世界から迷ひ出て別れ別れになつて居る者にもとの一つに還れといふ命令をする爲に、先づ別れ別れの世界の束縛のなやみを感じしめて猛烈に一の世界に融け入る様に引き込むのであります。(以上 昭和六年十月九日)

その三

聖徳太子の十七條憲法の第二條に「篤く三寶を敬へ。三寶とは佛・法・僧なり、則ち四生之終歸・萬國之極宗なり。」とあります。佛・法・僧の三寶は凡ての生あるものの終局の歸であります。又萬國の極の宗であると申されるのであります。

親鸞聖人は阿彌陀佛の事を、畢竟依と申された。これは信の味ひであります。阿彌陀佛のお心は十方衆生の心を心とし給ふ大悲心であります。あの様な大きな佛の心、又この阿彌陀佛の大きな心を讃歎して大心海とも申されます。その心に觸れ合つてその心に融け合つた時に我々の自由があります。萬物一體といふところまで徹底して始めて自由といふ言葉を味ふ事が出来るのであります。

我々は萬物相關の世界から一步進めて萬物一體の思想に出た時に始めて明るい広い世界を知るのであります。其處まで行かねば本當の自由はありません。いくら財産を平均しても、いくら權力を分配してみても、若し我々の心の底に一つになる味ひが味はれない時は決して其の人には明るい世界は開かれませんが。親鸞聖人が法然聖人の教によつて開かれた信心を、その師法然聖人の信心と一つの信心であると申されました。この事は『御傳鈔』の信心一異の問答の上に現はれてをります。或時親鸞聖人は澤山の御弟子の人と共に談じ合つて居られた。その時私の信心も恩師法然聖人の信心と一つなんだ、といはれました。他の人は以ての外といひました。「あなたはまだ若い人、聖人は御老體、四十も年が勝れてられる。その立派なお師匠様とどうして信心が一つであるといはれやう。それは出過ぎた云ひ分ではないか。」と咎める。親鸞聖人は「いやさうではない、智慧や學問の方面から一つだといふのなら

畏れ多くならべくらべも出来ないが、併し往生の信心に於ては法然聖人の信心も佛から賜はられた信心であるし私の信心も佛から賜はつた信心である。二つの信心があるのではない。聖人も自分も一つの佛の心の中に這入つてゐるのだ。」と申された。その氣持は友達や弟子にはわからなかつた。そこで皆と一緒に師匠を訪ねられた。法然聖人の申されるには「それは善信房の申される事が眞實である。わしの行く浄土へは、信心が違つてをるならばゆかれぬ。」と申されたので他のお弟子は驚いて舌を巻き口を閉ぢて止んだといふ事が記されてあります。法然聖人の御信心と自分の信心と一つと申されたこの親鸞聖人の御信心こそ眞實の自由境であります。

信心の終局する所は佛・法・僧の三寶の歸結する所であります。凡てにとけ込み凡てをとかず廣い心、この心を味ふ時、過去も未來も現在も明るく期かになるのであります。この心がわかつてはじめて人生が明るくなるのであり

ます。眞の自由といふものはこの信心の上のみに味はれるのであります。物質的な差別的な境地に於ては決して味はれるものではありません。物質的な不自由な世界からやがて絶對一如の世界に這入らねばならない必然性を自覺せしめるのが佛陀の教であります。

行くところへゆかねば、納まるるところへ納まらねば止まないのが我々の心であります。不自由の束縛の悩みの世界即ち執着の娑婆世界から解脱して涅槃一實の浄土に往生せねば止まぬのであります。此の生活に淋しさを感じ、此の制約された世界に束縛の悩みを感じる時に解脱する心が起ります。その心の起る時に高らかにここに絶對自由の境地があるから來れと叫ばれるのが必然の世界から顯現された佛陀の叫び聲であります。そして私共はいろいろな悩みの中からどうか解脱したいといふ願ひの起る時、この一の世界から高らかに我々を呼びかけて下さる佛の招喚の聲を聞くのであります。

すつと昔の昔に世自在王佛といふ自覺者がありました。この自覺者のお話を聞かれました當時の國王が、自分の生活が如何にも種々の制約を受けて窮屈なものであるといふ事を感じられて、どうか此の世自在王佛の様な朗かな自由自在の生活者でありたいといふ願を起されて王様の位をなけすてて修行者になられました。これが法藏菩薩であります。この法藏菩薩は後に願ひを起し修行して阿彌陀佛といふ徳の高い佛になりました。この法藏菩薩が世自在王佛の處に詣でて、その御足を禮し自覺者佛陀としての御徳をつらつら御讃歎なされ又感謝の意を述べられました。そしてそれから御自分の願ひを縷々と披瀝された、その御言葉の中に「願はくは我佛とならん」といふ御言葉があります。これはどうか自分も佛陀になりたい、あなたの様な自覺者になりたいと申されるのであります。次に「聖法の王と齊しく生死を過度して解脱せざるはなからん」とのべておいでになります。これはあなたは聖法を

司る王様であります、私はあなたと等しくなりたい、即ち、どうか私もあなたと等しく生死を過度して一切を解脱した身になりたい。」と申されたのであります。生死を過度するといふ事は委しくいへば生・老・病・死の四苦を超越することでありませす。一昨夜も人生の苦痛は四苦又は八苦であると申しました。そしてそれが苦痛である事は自分の欲求が妨げられるからである。即ち私共が不自由なといふことは束縛を感じるからであると申しました。それで生・老・病・死の四苦を超越するといふのは人生の束縛から超越するといふ事でありませす。殊に生死といふ時には時間の制約であります。生死を過度したいといふことは時間の制約から超越して無限の生命を得たいといふことでもあります。次に「解脱せざるはなからん。」と云ふのは、解は解決とか解釋とかいふ事で束縛から或は繫縛からとかれる意味であります。次に脱とは牢獄からのがれる事でありませす。牢獄は即ち束縛の牢獄であります。それで解脱

せざるはなからんといふ時には一切の束縛即ち一切のとははれの牢屋からのがれ出たい、言葉を換へて言へば即ち自由の身になりたいといふことであります。尙進んでいへばあらゆる空間的な束縛から自由になつて朗かな明るい身になりたいと望まれたのであります。

法藏菩薩はこの願を述べてから「どうかあなたも私を信じて見てみて下さい、私はこの願の成就の爲に一生懸命に盡します、たとへこの身を諸々の苦や毒のなかに止くとも決してあとすざりは致しません。」と誓ひを立てられました。それからだんだん世自在王佛の教を受け、思惟に思惟を重ねて一切の事物に對し束縛を破つて一切に解け込みたい、一切をとかしたいといふお願から四十八の願を建て、その願を成就する爲に長い間の修行を重ねて限りのない壽命即ち時間的自由、限りのない光明即ち空間的自由を悟り現した阿彌陀佛といふ佛になられました。この阿彌陀佛が常に我々によつて拜まれ給

ふ佛陀であります。

自由自在を得られた法藏菩薩が阿彌陀佛となられるに就ては世自在王佛の教が先にあつたといふ事を『無量壽經』によつて我々は教へられるのであります。自由を求める我々の心は自由の世界から導き出すところの願であること、を思はしめられるのであります。世自在王佛の教によつて自由の欲求が起ります。この欲求を靜かに考へる時に我々一切の衆生の心の底に湧いてゐる願がわかります。生死を過度して解脱せざるはなからんといふ願は、一切衆生の心底にある願を法藏菩薩が一切衆生に代つて述べて下さつたのであります。

私達が束縛された時に悩み、とらはれた時に苦しみ、さうして苦しみから脱れたい願が起ります。是が法藏菩薩の願が我々の心の中に潜んでゐる證據であります。我々に苦しみがあり、悩みがあるといふ事は、自由の呼び聲が響いてをるからであります。海が近づけば波の音がきこえ、山近ければ松風

の音がきこえる、人生の束縛を苦しむのは解脱への門に近づいてゐるらしいであります。親子夫婦の間に通ひのない事を悲しむ時、社會の上に融合のない事を悲しむ時に、一つになる事の近づいてゐる事を考へられます。別々になつてゐる事が當り前のやうに考へられてゐるものの心にそれが悲しくなつて來るのは、もはや融合ふ前兆であります。

近代の個人主義の人は一人となれと主張します。この一人といふのは絶對の一人であるならば自由境であります。しかし相對の一人ならば孤立であつてそこには本當の自由はない。孤立は個と個と別々に立つ事で實に淋しい世界である。近代人は其淋しさを金によつて財産によつて其日の五官の上にくる末梢神經の刺戟を喜んで忘れようとする。そして別れてゐるといふ事を悲しむよりも、別れるといふ事に餘計喜びを感じてゐる者さへ居る。近代人は人と人と融け合ふといふ事よりも、一人一人が別れてゆく事に努力してゆく

のぢやないかと考へられる。教育勅語に

朕惟フニ我カ皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ徳ヲ樹ツルコト深厚ナリ我カ臣民克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ世々厥ノ美ヲ濟セルハ此レ我カ國體ノ精華ニシテ教育ノ淵源亦實ニ此ニ存ス

と明治天皇が教へられました。此お言葉を拜しますと「億兆心ヲ一ニス」といふところに非常に心を引かれます。萬民が心を一にする、爰に國體の精華があります。爰に教育の淵源があります。親鸞聖人が法然聖人の信心と自分の信心と一つであると味はれたのは此味ひであります。此世界が阿彌陀佛のお心であります。中には眞宗の信心、法華宗の信心、天台宗の信心など幾つもある様に思つてゐるが、信心は一つしかない、一つの心に溶けるのであります。信心を得た者は萬人に融合ふ、教育勅語はその心を教へられたものであります。國民が親子別々に、夫婦別々になる生活を教へるのでなく、皆が一つ

にとけてゆく事を教へられるのであります。一つでなけりや教育の可能性がないのであります。

教育勅語は一心を自覺せしめる教であります。陛下御自身が教をうける身になられて教育勅語の最後に、

朕爾臣民ト俱ニ拳々服膺シテ咸其徳ヲ一ニセン事ヲ庶幾フ

と仰せられました。此御教は尊い御心であります。吾々は教育勅語を讀んで法藏菩薩が世自在王佛の前に出て仰せられた「願はくは我佛とならん」に聖法の王と齊しく、生死を過度して解脱せざるはなからん。」と叫ばれた御言葉と合せ味ふのであります。尙進んでは法藏菩薩が「設ひ我佛を得たらんに十方の衆生至心に信樂して我國に生れんと欲し乃至十念せん、若し生れずば正覺を取らじ、唯五逆と正法を誹謗せんをば除く。」とある第十八願のお心を仰がずには居られません。

一つになる、徳を一つにする、一つの心に流れ込む、其處に本當の自由といふものがあります。本當の解脱がそこにあります。近來は歐洲では佛蘭西革命以來個人的にだんだん分裂する様になつて來ました。日本でもこの影響を受けて個人主義になつて來たのであります。そこから今日の資本主義や社會主義も生れて來たのであります。

他人の自由を蹂躪し喧嘩して居なければならぬ様な自由には決して永遠性が無いのであります。だんだん人々が別れりや別れる程悩みます。近來日本の國でも不景氣で困るというてゐますが、何も不景氣だけで困るといふ譯ではありません。日本では食物は餘る程あります、米も澤山あり野菜も澤山あります、そして食へぬ者があるといふのは、何處かに不合理な所があるからであります。資本家は資本があまりあまつて投資する先がなく、労働者は働く先がなく困る、従つて食へないのです。

皆が人を信ぜず、自分の個性に籠城して人を見れば互に疑ひ、個々別々になつてゐます。罰あたりである。物が足らんで苦しいのでなしに、心が解けないので悩んでゐるのであります。金持も貧乏人も心が解けぬから苦しむのであります。貧しい人は金がなくて苦しみ、金があるものは金があつて苦しむ。金の澤山あるアメリカでも悩みがあります。世界中が悩んでゐる。何故かといふに、すべてが個人主義によつて苦しむのであります、人々が信じ合はないのが現代の煩悶の源であります。機械の發達の罪ではなく無信心の罪であります。問題は金そのものにあるのではなくて金を運用する經濟組織の如何にあるのであります。今日の個人主義の基礎が毀れなければ本當の救ひは得られません。共產主義を危険思想だといひますが、危険思想は共產主義ばかりでなく、個人主義に基いた今日の資本主義も危険であります。人々が互に疑ひ合ひ、親子が別々になり、夫婦兄弟が別々になり、互に疑

んでゐるのは財産組織からきた影響もないではありませんが、その根本は財産を解脫した一の世界の信心がないからであります。

汽車に乗つても敵同志の様に一人の人が腕をのばすと片方が肘を張つて隣同志睨み通してゐる、恐ろしい事でありました。解け合はないから譲り合はない、もつと皆打ち解け合はないから、社會主義が起つたのであります。それはいい事でありました。社會主義は近代人の弊害である個人主義を破つて行かうとする事から起ります。打ちとけたい心から財産を共有にしたらばといふ思ひから共產主義が起つたのであります。

今日の財産制度は私有財産制度であります。この制度に依つてあらゆる苦しみが起るといふなら、すべての財産を棄てたつてもよいのであります。釋尊は現にこれ棄てて自由境を得て居られるのであります。私有財産制度を破る爲に急激な階級闘争的な革命をやらうとする共產主義者の思想の運動も

危険であります。併しその中心點には大いに尊いとところが認められます。共產主義が悪いといふのではない、やはりそれは個人主義から解脱への歩みであります。

億兆心を一にしてといふ尊い歴史のある國體までも無視して或は自己自身をも破滅する運動を考へたり、社會を混亂する危険人物は相當に取り締らねばなりません。個人主義的資本主義社會の不完全を認めて之を破壊して自由な世界を開かうとする願は悪い事ではない、此願の眼を開いて教育の御勅語を讀む時に明治天皇は私達に進むべき道を教へて下さるのであります。それは精神的一心の世界であります。

「和ヲ以テ貴トナシ、忤フコト無キヲ宗ト爲ス。」と聖徳太子の十七條憲法の第一條に教へられた言葉は現代の通弊を救ふ尊い松明であります。所謂上下心を一にし億兆心を一にするの精神は天照大神の和魂であります。此和魂

を體得する時に始めて明るい爽やかな世界が味はれるのであります。この和魂を成就する爲に御照覽ましますのが天皇であらせられます。此天皇によつて天皇御自ら億兆の心を味はせられ「袞々服膺シテ咸共徳ヲ一ニセン事ヲ庶幾フ」と望ませられる此天皇の御心が和魂への精進であります。此精進の前に資本主義も共産主義も大切な事では決してありません。夫婦が別れ別れに又親子相争ひ朋友が互に信じ合はぬ様な今日の社會は國體に相應してをるとは思はれませぬ。

現今の民法などは西洋の翻譯で日本の國體に合はない節々も澤山ある様であります。これは明治以後西洋に行つて學問した法律家が日本の國體を知らずに民法を作つたからである。こんな風に現代の日本の社會組織は民法の上に乗って混亂の姿が現はれてゐるのであります。片方ではどんどん緊縮だといふて失業者を作り、片方では失業者救済だといふて土木工事を興してをる。

これも一つの矛盾であります。東京あたりでは不景氣だといひながら麻雀俱樂部やカフェやダンスホールがだんだんふえてゆきます。之も矛盾相の一つであります。こんな矛盾撞着の相を見ると現代の日本は氣狂ひの様に見える。餘りに皆が個人主義になり過ぎてをると思ひます。もつと落着いて眞剣に考へる事が大切であります。自分の内の欲求をもつと大きくして一切を抱擁してゆくやうな大きな願を持たねばなりません。人を蹂躪してゆく様な小さな願を持つてゐてはなりません。今日の人は直ぐに勝つた負けるといふ事に没頭する、佛様の御事を聞くとそんな事は愉快に思へなくなつてきます。他を慮めて自分だけよい事をしようといふやうな心の人には決して明るい朗かな世界が開かれぬのであります。

近代人の自由は奴隷を豫想しなくては得られぬ自由であります。さういふ自由を求むるのは恐ろしい道であります。何時破壊されるか分らない道であ

ります。私共はこんな狭い道を選んではなりません。広い道を選ばねばなりません。広い道とは萬人と共にゆかれる道であります。普く衆生と共にゆく道であります。佛教に一切恭敬とある道がそれです。大衆を統理して一切無礙なる道を求めねばなりません。萬人の心と一つに融合うてのみそこに初めて自由があります。物質に恵まれてゐる人でも人と人の差別を持つ人はいつも不自由であります。自由は物質に捉はれないところにあります。豊かな人は物を持つた人ではない。すべてを離れたところに自由があり豊さがあります。友人は私に「あなたは世界中の人をお友達とされてゐる。」と云はれた事があります。又「世界中を我家としてゐるから健康なのでせう。」ともその人は云つてゐました。さうだ世界中が我家である。然し又普通の意味に於ける我家といふものは一つも持たない。石川縣の北安田に曉烏敏の家はあるけれど、これも普通の人の思ふやうな私有物ではない。ここが私の自由な

ところであります。

かういふ事を淺薄に聞くと人の物は俺の物、俺の物は俺の物だといふ様な横着に聞えます。然し私の味うてゐる世界はそんな怠慢い思想ではありません。人の齒磨揚子を使つても構はぬ、人のシャツを着ても構はぬ、といふやうな混雜した社會を望んでゐるではありません。さういふ物はそれぞれ決めておいてもよい。然し常に其所有物に拘泥せぬやうにせねばなりません。世の中は平等といつても男の褲を女がする必要はない。所有物は其儘にしておいて相許し犯さず犯されずあるところに自由があります。個々別々でなしに内心が一つになつてしかも個々別々を相許すところに自由と服従との双運の自由があります。束縛の差別其儘が自由平等であります。人と約束するといふ窮屈さの中に自由があり、借りたものを返すといふ中に自由があります。始めあるものには終りがあります。そこに自由の感得があります。初あつ

て終のない様にしようといふやうな無理な願を起す人には自由がありません。眞の自由は絶對唯一の境地にのみ味はれます。其自由の境地は差別界の個々の關係の上にも照らして自由の光を放たしめるのであります。絶對の自由境に到達したものが差別境を見る時に其差別そのままに自由を感じる事が出来るのであります。

秋の三夜をしめやかに皆さんと共に自由に就いて種々考へてまゐりました。まだまだ考へねばならぬ事が澤山あるやうであります。時間がありませんから此度はこれにて御別れします。(以上 昭和六年十月十日)

昭和七年五月五日印刷
昭和七年五月十日發行

(11,000)

定價金參拾錢

著作兼發行人 石川縣石川郡出城村北安田 曉 烏 敏

印刷人 京都市烏丸通七條下ル西入 堀 井 清

印刷所 京都市東九條山王町三八 弘文社 印刷所

發行所

石川縣石川郡
出城村北安田

香 草 舍

電話松任局一八番
振替金澤三六九八番

曉烏 敏主筆

月刊 雜誌 願

慧

定價一部拾錢
一ヶ年金壹圓

◎『願慧』は主として曉烏の手になる論文・講話・隨筆・詩歌・紀行・消息を發表する月刊雜誌です。

◎『願慧』は曉烏が友人に頒つ書簡代りのやうなものです。

◎『願慧』は曉烏が面白いと感じた友人の論說・詩歌などを紹介します。

◎『願慧』は理性の叫びをあげる山上です。思想・信念を語り合ふ殿堂です。

發行所

石川縣石川郡
出城村北安田

香

草

舍

振替金簿三六九八

曉烏敏主要著作目錄

◎更生三部作

第一卷 更生の前後	金 參圓
第二卷 獨立者の宣言	金貳圓五拾錢
第三卷 前進する者	金貳圓八拾錢

◎佛說無量壽經叢書

阿彌陀佛の生るるまで	金 壹圓
嘆佛偈講話	金壹圓貳拾錢
阿彌陀佛とその師との問答	金 壹圓
阿彌陀佛の本願上卷	金壹圓五拾錢
阿彌陀佛の本願下卷	金壹圓五拾錢
三誓偈講話	金 壹圓

阿彌陀佛の修行とその浄土
信心生活の種々相
本願成就の信心
東方偈講話
五惡段講話
聖行段講話

金壹圓七拾錢
金壹圓貳拾錢
金壹圓五拾錢
金壹圓參拾錢
金壹圓五拾錢
金壹圓五拾錢

◎歎異鈔叢書

歎異鈔第二節講話
歎異鈔第三・四・五・六節講話

金九拾圓
金壹圓

◎にほひぐさ叢書

第一卷 生くる日 詩歌集
第二卷 親鸞聖人論
第三卷 死の國々
第四卷 父の印象

金壹圓貳拾錢
金壹圓貳拾錢
金壹圓參拾錢
金壹圓貳拾錢

第五卷 温かき大地 詩歌集
第六卷 諸行無常 詩歌集
第七卷 華嚴三昧の中より 詩歌集
第八卷 常倫を超出する者 詩歌集
第九卷 不可説轉の記者 詩歌集
第十卷 沈黙の自殺者 詩歌集
第十一卷 母の死 詩歌集
第十二卷 棺圓と圓死 詩歌集
第十三卷 内省せられたる自己 詩歌集
第十四卷 老境の黎明 詩歌集
第十五卷 地球をめぐるて 詩歌集

◎パンフレット

第一 運命論者の群
第二 華嚴經の上の人
第三 蓮如の論話
第四 道論話

金貳拾五錢
金拾五錢
金拾五錢
金拾五錢

第五	ソク	親鸞	の	人	の	信	念	ス	金貳拾錢
第六	ヲ	鸞	を	超	え	た	人	間	金貳拾錢
第七	ハ	神	の	矛盾	と	その	解決		金貳拾錢
第八	ニ	人生	の	根本	の	精神	決定		金貳拾錢
第九	ハ	佛	の	根	本	精神	決定		金貳拾錢
第十	ニ	肉	體	の	彼	精神	決定		金貳拾錢
第十一	ハ	尊	嚴	なる	存在	の	認識		金貳拾錢
第十二	ニ	無	罪	の	宣	言			金貳拾錢
第十三	ハ	新	日	本	の	進	路		金貳拾錢
第十四	ニ	國	土	の	攝取	と	莊		金貳拾錢
第十五	ハ	信	治	の	提	唱			金貳拾錢
第十六	ニ	自	實	信	心	の	精		金貳拾錢
第十七	ハ	生	活	中	心	の	決		金貳拾錢
第十八	ニ	此	の	師	と	此	の		金貳拾錢
第十九	ハ	社	會	推	移	の	根		金貳拾錢
第二十	ニ	主	觀	的	信	念	の		金貳拾錢
第二十一	ハ	客	觀	的	安	當	性		金貳拾錢
第二十二	ニ	日	本	精	神				金貳拾錢

第二十三	忠	義	に	魂	の	超	え	て	金貳拾錢
第二十四	大	和	を	超	え	て			金貳拾錢
第二十五	闘	争	を	超	え	て			金貳拾錢
第二十六	ア	メ	リ	カ	の	印	象		金貳拾錢
第二十七	古	事	記	の	世	界	象		金貳拾錢
第二十八	横	川	法	語	の	講	話		金貳拾錢
第二十九	聖	德	法	語	の	講	話		金貳拾錢
第三十	報	恩	講	式	文	講	話		金貳拾錢
第三十一	國	民	教	育	の	淵	源		金貳拾錢
第三十二	自	由	教	育	の	淵	源		金貳拾錢

◎別刊

印度佛跡巡拜記 (曉鳥敏 暉峻康範共著) 金貳圓五拾錢

まことの心 (信の提唱)のローマ字書き 金七拾錢

智慧について (隨筆) (京都中外出版株式會社刊行) 金壹拾錢

釋迦基督その他 (東京春秋社刊行) 金貳圓貳拾錢

聖德皇太子十七條憲法 金五錢

◎曉烏敏 監修 佛教聖典叢書

第十篇	第九篇	第八篇	第七篇	第六篇	第五篇	第四篇	第三篇	第二篇	第一篇
外道問大乘無我義經	蘇那檀陀經	蛇喻經	箭喻經	鋸譬喻經	鷲拏摩經	小象跡喻經	大乘稻芊經	六方禮經	佛涅槃經
櫻部文鏡譯	林五邦譯	林五邦譯	林五邦譯	林五邦譯	林五邦譯	林五邦譯	櫻部文鏡譯	林五邦譯	林五邦譯
金拾錢	金拾錢	金拾錢	金拾錢	金拾錢	金拾錢	金拾錢	金拾貳錢	金拾貳錢	金四拾五錢

發行所

石川縣石川郡
出城村北安田

香 草 舍

電話松任局一一八番
振替金澤三六九八番

MADE IN JAPAN.

終

